University of Pennsylvania

From the SelectedWorks of Cecilia S Seigle Ph.D.

July 2012

江戸時代女性の噂話第一部：都会の庶民の女性(町の女１)

Contact Author

Start Your Own SelectedWorks

Notify Me of New Work

Available at: http://works.bepress.com/cecilia_seigle/20

江戸時代女性の噂話　第一部： 都会の庶民の女性（町の女１）

日本はおかしな國である。国全体から見ると山がやたらに多くて農耕できる土地は昔から１６％くらいだといわれていた。しかし食料事情は海産物農産物に恵まれていて人口は多く、都市は早くからよく発達していた。だから江戸の文化というとまるきり都会的である。そうして都会を作り出し繁盛させたのは町人階級だったから、町人の噂は非常に多く、またその娘や女房の噂も多い。

市井の人々の流言は一応禁じられていたが,その法律はきびしく実施されていた訳ではない。 金のかからない娯楽は限られた時代だから少し珍しい話は忽ち町の噂にのぼったことだろう。どこの國でもおしゃべりで噂を広めるのは女性――特に子育て期を過ぎたおばさん連中――だから、おばさん達がさかんに井戸端で噂を広めただろうが、すでに述べたように書きとめたのは大多数が男性である。 以下話題に登った事柄を現代俗語に書き直してみようと思うが、記録を離れれば原典に厳しく従う必要はないので、同じような挿話からとってまとめたものもある。

これは日本に限った事ではないのだが、百年くらい遡ると人々の考えは定着していて、女というものは大体弱く、慎ましく、小柄で、特に、町人ならば、武士階級ならば、貴族ならば、どのような服装でどのように振るまうべきもの、 そうして原則的に男の支配の下に立つべきものと考えられていた。だからその規格に外れた女は噂に立ちやすかった。

大女と大力の女たち

都会にも田舎にも体が大きくて男以上に力のある女性が時々現れた。そんな女達の噂を幾つか紹介しよう。

江戸の音羽町の茶屋石見屋の女房のおしげは、美人で優しくおとなしい人なので石見屋の宝と呼ばれていたが、實は大の力持ちであることがある事件で明らかになって有名になった。ある時その町に住む相撲年寄の家に集まった大勢の若い相撲取りのうちの三四人が、近所の日蓮宗の寺で万巻陀羅尼修行があって賑わっているのを見に出かけた。 この若者たちはたわけた連中で、おびただしい参詣人の間を練り歩き、若い女などに突き当たったりその前に立ちふさがったりして面白がっていた。

石見屋のおしげも若い女中を一人連れて参詣し、蓮光寺の客殿の通りで行事を待っていると、相撲取りが一人来ておしげのお尻をなでた。彼女が知らぬふりをしていると力士は図に乗っておしげの体に悪戯をつづけていた。すると、おしげが急にその手を逆手に取って相撲取りの体を膝の下に敷き、とてつもない大力で押さえつけた。まるで大岩に押しつぶされたような痛さで、相撲取りは真っ青になり、物も言えずに冷汗を流して涙ぐみ苦しがった。おしげは顔色も変えず、男を組み敷いたまま、ふところから水晶の数珠を出して落ち着き払って題目を唱えていた。

そのうちにとうとう題目講中の役人が中に立って謝ったのでおしげは許してやった。助けてもらった馬鹿者は平身低頭して逃げていった。[1]

体が大きいというだけで威張り散らす男を，完璧にやっつける女は小気味よくて、こんな話を讀むと私はだんぜん機嫌がよくなる。この相撲取りは今時の不良少年とあまり変わらない。徒党を頼りに、女をからかったりいじめたりして楽しもうというのである。たいした悪事ではないが女性にとっては大迷惑である。放っておけばますます悪くなるだろう。だから女の身で不良男にお灸をすえてやったというのは胸がすく。

その後音羽町のおしげのことを知らない人はいなくなったそうだが、全く同じ話が『三田村鳶魚全集』に「音羽の大力女おしげ」として出て居る。[2] 多分馬場文耕の『当世武野俗談』から得た話だろう。

---

[1] 当世武野俗談、p. 117。

大江戸には大力の大女が時々出現したらしく、十七世紀後半の延享時代にすでに女相撲の見世物があったそうである。[3]　　大力の女や大柄な女の噂は見聞集によく出て来る。つまり大きい女性や、女の大力というのは「異常だ」「普通の女ではない」「見世物になる」と考えられていたのである。

その一例は安永年間(1772-1780)に堺町の楽屋新道に出た柳川ともよという女で、大八車に米四俵か五俵を乗せて持ち上げたり、仰向けに寝て腹の上に臼をのせて他の人に米をつかせたり、碁盤を片手でもって百目蝋燭を消したりする芸をみせたそうである。江戸で女の力持ちが見世物になったのはこれが初めてで，浮世絵にも描かれたという。

ともよは越後高田の貧しい百姓の娘で、二十にならないうちに、六年間十両の契約で大根畑の柳屋という私娼の家に売られた。いわゆる岡場所(非公認の遊郭)である。ばかでかい体は色白で肌が非常に美しく顔立ちもよかったのでたいそう評判がよかった。

ある日酒屋から樽が届けられたが、男手がなく店先に置いたままになっていたのを、ともよが来て樽をちょいと抱えて台所へ持って行ったのでみんな驚いた。柳屋の亭主は帰って来てそれを聞いて、ともよを見世物に出せばもうかるだろうと考えて香具師に相談した。亭主はともよに三ヶ月ほど見世物に出てくれれば、契約書を返す。その後は國へ帰ってもいいと言い出し、ともよとその提案を受け入れて契約をした。彼女は安永五年(1776)五月から江戸中を廻り大阪まで行ったようである。彼女のことは黄表紙にも風来山人（平賀源内）の『力婦伝』にも書かれている。

平賀源内はともよについてこう書いている：「楽屋新道の賑い、いかなる事かと見れば，大阪下り女ちからわざ。ともよと染ぬきの大幟木戸口のやっさもっさ大入とは言も…高田近郷の産のその容貌美にして、膚はぜんまいの綿のごとく、ぼちゃぼちゃやわやわと、しかも雪国の白きを見せ、皮薄なる事のし縮みの如く、湯上がり姿は鹽引きの色をおびたり。越後の国の大坊主も首のありたけ延しつべき風情更に力者のあらくれたるさまにあらず」というのである。[4]

わざとふざけた形容をしたのだろう、ぼちゃぼちゃやわやわはわかるが、ぜんまいの綿のような、のし縮みのような皮膚というのはどうもいただけない。のし縮みというのはうすい縮織で美しい高価な織物だが、ぜんまいの綿と一緒に比喩に使われるとどのような皮膚なのかわからなくなる。塩引きというのは鮭などの魚を塩漬けにしたものでどうも美しい色とは思えない。盗賊仲間の隠語である「たそがれの潮引き」のことを言ったのかも知れない。夕焼けのぼーっとオレンジ色を帯びたバラ色の空ならば美しいと言える。もち肌の美しい女が腹の上に石臼を載せて米をつかせれば男たちはやんやとはやし立てただろうが半身は裸だったのだろう。ひどい扱いである。しかし見世物に出て目立つのが好きな女だったら、長年売娼婦として働くより三ヶ月自分の力持ちぶりを見せる方が楽しかったのかも知れない。

また延宝(1673-1680)の頃，　近江生まれのおよめという大柄な女が見世物に出たことがあった。世の中の人々は大女房と呼んだそうだ。身長は２メートル１９センチ、足の長さ３８センチ、手の長さ３０．５センチ、「全身がすぐれて高く，力は非常に強く、きわめて達者な男にもまさる」と書いてある。その頃の俳諧に大女房とあるのはこの女のことである。見世物に出したとき、いよいよ丈を高く見せるために足駄をはかせたらしく、 嵐雪が「古足駄猛火となってもえあがり」という句を書き「大女房の大蛇いかって」と続けている。西鶴は［西鶴大矢数］延宝八年に「大女房一丈二尺たつ霞」と詠んでいる。[5]

柳屋のともよの四十年後、文化六年(1809)に浅草柳稲荷あたりの茶屋から淀滝という力持ちが出て有名になった。彼女もはじめは品川の橋向うの下等な鶴屋という家にいた安い遊女で「蔦の」とも呼ばれていた。下総の百姓の娘だったが、二十三歳のとき力持ちの見世物に出て釣り鐘を持ち上げたり五斗俵の先へ筆を結びつけて字を書いたりして見せた。身長は１メートル７８センチ、着丈は１メートル８９センチというからおよめ程ではないが相当な大女である。彼女の手形はいろんな所に残っているが

---

[2] 三田村鳶魚全集、15:30-31。

[3] 井原西鶴『色里三所帯』ｐ.174。

[4] 力婦伝、上，433-434。

[5] 用捨箱、218-219；足薪翁記、p. 66-67。

長さ２１センチ以上、幅１５センチあったと言うから大仏の手のようである。客の前に出ても恥ずかしがって手を懐に隠していた。しかしめずらしい女なのでおおいにはやったという。[6]

手の大きい女の話なら『甲子夜話』にも出ている。これは上記の淀滝の事らしく、生国下総小金村百姓新七の娘で、品川本宿の鶴屋の「蔦野」と言う女、二十三歳、身長は五尺八寸五分（これは５フィート１０インチ位、米では１メートル９２センチ位）とあり、文化 丁卯（四年,1807)にその大きい手痕が有名になって紙に刷られて売られたらしく,絵が出ているが実際の寸法は書かれていないので大きさの実感はない。[7]

この女性については 豊芥子なども書いているが、江戸後期の人達は何でも変わった人間、動物、物品，芸などを見るのが大好きだった。例えば、小寺玉晁の「見世物雑志」という本は 1818 年から 1836 年まで名古屋でどんな人や物が民衆の見世物に供されたかを述べている。その中には女性も何人かいて，恥辱的な行為をさせられて見物の対象にされた。女性同志の相撲や女性と盲目の男の相撲もあった。 力持ちの女には人気があって国芳の浮世絵にも「近江の国の勇婦お兼」という女が荒馬を素手で止めている絵がある。荒馬はお兼を後脚でけり上げようとしているのだがお兼はびくともしない。これは感嘆にあたいするのだが、見物人のなかには女らしくない，という批判もあっただろう。

馬鹿物語

『十八大通』という本は十八世紀後半から十九世紀にかけて「大通」と呼ばれた蔵前の札差し成金の話を集めたものだが、 一名「御蔵前馬鹿物語」とも呼ばれているくらい、彼らの愚行のさまざまが語られている。しかし自他ともに「通」を称する札差の話だから女性の話は少ない。彼らにとって女性は刺身のつま，雑誌の付録程度だったのである。その 「付録」 女性の一人は 札差の伊勢屋宗四郎の妾でおみなという。

伊勢屋宗四郎二代目、号を全吏と言った人はたいへんな浪費家道楽者だった。或る年の春、毎月十五日の習慣で柳島の妙見神社へ妾のおみなと太鼓持ち五六人を連れて出かけた。参詣のあと吾妻の森へ土手伝いに向かい、無駄口と駄じゃれをたたきながら歩いている時、大尽全吏はふと思いついて言った。

「お前たち，俺がおみなの口を吸いながら(接吻、キス)先へ行くから，後からついて来てそれを見つけた者には一両づつやろう。」

たいこたちはそれを聞いて大喜び，こんなにらくな儲け方はない。そこでみんな勇んで目を見張りながらついて行き，全吏が先へ歩いて行っておみなにキスする度に「そら旦那見つけた」と大騒ぎすると，全吏は「南無三，ソレ一両」と紙入れから一両出して投げてやった。又一二間行ってキスする。ソレ旦那、ソレ一両！で，吾妻の森までのわずか三四町の土手道の上で自分の妾に接吻して十二両ほど太鼓持ちにばらまいたという。この本の著者は「おそらく此のようなたわけた金使いは，今の世の中にはあるまい」と言っている。[8]

「十八大通」というのはそんな男達だったのか、馬鹿馬鹿しい、と私たちは思うが、やはり時代の性格がよく出ていると思う。周知のように江戸の武士の収入は領地から来る米ではなく，自分の主人の領地の農民が納める米を蔵米として受け取っていた。地方から集まる蔵米が年に三度旗本や御家人に支給される。それは米で支給される形と現金に変えて支給される形式があり，その組み合わせもあったが、関東東北の農地から納められた米はすべて台東区蔵前にあった幕府のお米蔵に入れられ，そこから幕臣たちに支給されたがそれらはすべて米商人の手をへて武士の家政に使われる米や現金になった。米で知行を支給される者もそれを売らなければ必要な現金は得られなかったからどうしても誰もが米問屋や米の仲買人の世話にならなければならず，武士に変わって蔵米を受け取り，それを米問屋に売却して現金を取って武士に渡す，その手間のかかる仕事を全部引き受けたのが札差しで、もっとも儲かる仕事

---

[6] 三田村鳶魚全集、15:48-50。

[7] 甲子夜話１、p. 69.

[8] 十八大通、 p. 413-414。

であった。なぜ儲かったかというと米価は毎日変動しているが、米を扱っている商人はその変動を誰よりもよく知っている。質屋でも両替屋でも札差しでも、換算の仕事に携わっている者はその変動の差をよく讀み取って変動を利用して自分の都合の良い時に売り買いすれば利を得る事は簡単であった。武士はもとより経済の事についてはよく知らず、そんな事を気にする事は恥だと思っていたから札差しは誰からも咎めを受ける事なしに、十七世紀の終りから百年以上の間もっとも裕福な階級にのし上がった。

十八代通が全部札差しではなかったが，大多数の大通と呼ばれた人がその職業の中の大物だった。

おみなという女性は名前が出て来るだけで言葉も反応も性格もわからない。この情景では多分笑いながら全吏について行って、されるままだったのだろう。しかし主体性のない女だと非難するのはお門違いである。どこの國でもいつの時代でも金に支配される女性は多いが、江戸時代女が生きていくには自分の身に降って来た運命に従うより仕方のない人が多かった。おみなは多分全吏の思い者になって幸運だと思っていただろう。彼女のまわりにはきっと毎日身を削るような生活をしている女性が大勢いたに違いない。そうしてそれらの女性は人の身の上を心配してあげる余裕はなかったに違いない。おみなに出来たことはせいぜい全吏の機嫌をとって愛想を尽かされないように、放り出されないようにすることだっただろう。 庶民男女にとって大通はどんな大バカであろうと神様のような存在だったのだから。十八大通の連中はとにかくその時代では名だたる人達で、自分が成功者であることがいつも意識にあって、何でも変わった事をして驚かしてやろうという気持ちがあったのだ。

これは「通」の観念の根本にあった、関西の方でいう「粋」とはよほどかけ離れた人生観であった。「粋」な人間は人の生き方、世の中のあり方、人生の通念などをすっかり心得た人で、遊里で遊んでもものにこだわらず、執着せず、理解も思いやりもあって、しかも趣味も才能も持ちながらそれをひけらかさない人であった。だから江戸の「通」は始め十七世紀にお手本であった「粋」からずいぶん離れてしまい、十八世紀末までには全く反対の堕落した存在になっていた。

もう一つ同じ『御蔵前馬鹿物語』からの話を紹介しよう。これは遊女の話だから『遊女』の部に入れるべきだが十八大通の話なのでここに入れる。 吉原玉屋の第一級の遊女静(しずか)の話である。

札差で船主の富豪大内屋市兵衛はしずかを買って全盛を尽くしていた。ある時しずかは市兵衛と大けんかをした後、気晴らしに仲の町の茶屋へ行って酒を呑んでいた。すると市兵衛が来てしずかの腕をとらえ，「うぬ、猫又女郎め、ここに居たか」としずかを引き起こし、さんざんに叩きのめした。静の髪はほぐれ，櫛や笄はくだけてそこらに散らばった。静は自分の櫛笄をかき寄せかて膝の下に隠そうとした。市兵衛はますます怒って彼女をとらえ、

「しみったれ女郎め、櫛笄がそれほど惜しいか，業さらしめ！」とわめくと，静は「だってこれはばずなんですもの」と答えたという落とし話のような挿話である。[9]

ばずというのは馬のひずめで作った鼈甲の偽物である。高級遊女が持つ物ではない。此の時代鼈甲が大流行で誰もが高い櫛笄を苦労して買ったのである。有名遊女がばずの櫛笄をさしていることが見つかったら忽ちスキャンダルになる。それを恥じて静はかくそうとしたのだが、かえって暴き出されてしまったと言う気の毒な話である。それにしてもいくら金持ちだといっても，一流とされている高級遊女に対してこんな暴力をふるったのは許し難い気がする。『通』と言うのはもともとは物わかりのよい優雅で洒脱な男性のはずなのだから、このような蛮人にはその名の資格はない。

原武太夫の随筆に『隣の疝気』という面白い愚痴話があるが、それに「今の女郎の経済状態（やりくり）は昔と違い、切ないことが多い。以前はどんな太夫、全盛の女郎でも一人か二人の禿をつれて歩いていたが、その禿の衣類は木綿の着物だった。今は必ず二人の禿を連れ、その子供たちに花魁と少しも違わない絹のかさね着を着せ、櫛こうがい、かんざしにいたるまで同じ物をさせる。女郎の櫛一枚で九八両十両、又は二十両という鼈甲たいまいの櫛である。質の悪い鼈甲やフ(模様)の悪いたいまいを挿すと茶屋の女房娘まで噂するから、ずいぶんと気をつけて値段の高いものを挿させる。良質のたいまいの櫛一枚の値段は月見の節句の祝いをする位の費用がかかる」と書いている。だから静は素早く折れた安櫛をかき集めて他の人に見られないようにしたのである。同情をもよおす話である。

---

[9] 十八大通、p. 414

母娘の成功

江戸時代有名だった両国の幾世餅は元禄十七年(1704)に小松屋喜兵衛という人が初めて売り出した。上野の根本中堂の普請のときに金をもうけて、それを資本に餅屋の店を両国に開いたのである。喜兵衛の妻は以前いくよという名で吉原の河岸店（下級店）の女郎だったが、彼女が女郎をやめて喜兵衛と所帯を持ってからその餅を焼いて売り出した。それはこの夫婦が発明したのではなく、もともと浅草の藤屋が作り出した、餅の上に餡を載せた菓子だったらしい。しかし両国では幾世がその餅を作ったので幾世餅と呼ばれてだんだんよく売れるようになった。すると幾世の昔の客が応援して「日本一流幾代餅」と染め付けた暖簾を作らせて店先にかけたのでよく眼につき、店はおおいに繁盛した。後にその餡餅の元祖の藤屋が小松屋を訴えてけんかになった。知恵者の大岡越前守が考えて、それぞれ新宿と葛飾へ移るように命じた。すると両方の店がそんな片田舎では商売にならない、と折れて出て仲直りに終わったそうである。[10]　しかしその話は享保だから幾代餅が店を出してから十年以上後のことである。

喜兵衛は文盲で仮名も知らなかったが、子供が大勢できた時、娘の一人に勉強させた。その頃佐々木文山の門人だった文仙という人が橘町に手習いの熟を開いていた。喜兵衛の娘、まつはこの先生について唐様の習字を習い、自分の雅名を文錦とつけた。三社の託宣というものを真行草の三書体で書いて、浅草観音堂のそばの三社権現の堂へ扁額にしてかけたところ、 女子にしては珍しい能書だともてはやされて有名になった。[11]

親は文盲で息子や娘がえらくなる話は移民の多いアメリカにはよくあり、日本でも明治以後にはよくあったが、階級移動のわりと少なかった江戸時代の女性には珍しい話である。母親は吉原でも最低とされた河岸店の女郎から有名な餅屋のおかみになり、その娘はもっと名誉ある能書家になった。下克上時代の十五六世紀が終わった後も「出世」という言葉があるように、江戸時代にも多くの向上心のある男性が世間に出て名を表す事を望んでいた。女性にそのような野心を持つ人は少なく、この母娘も青雲の志を持ったわけではないだろう。小さく仕事を完成すればそれでよかったのである。文錦は母親の幾世程には有名にならなかったが母娘そろって江戸史に名前が残ったのはおめでたいことである。

姦通さまざま

江戸時代に起った姦通から犯罪にいたった事件は女性を悪者に仕立て上げた噂が多い。それは何と言っても男性中心の社会だったから夫が姦通しても罪にならず、有夫の女が夫以外の男と関係した場合だけが大騒動に発展したのである。普通品行方正の優しい妻が姦通罪を犯したのでは面白くないし気の毒なだけだから、深い事情があっても一方的に妻を悪者にしてしまったのかもしれない。それをいくつか並べてみる。

姦通　１：権七

江戸時代の半ばから後半にかけて権七というはやり言葉があった。それはわけのわからない事や道理にあわないことを言う人をそう呼んだのだが、その起源らしい話がある。

深川八幡町の魚売権七は自分の女房が仕立て屋と密通している事を知らなかった。有る夜密夫（まぶ)が来て居る時に思いがけなく権七が帰って来た。妻はすっかり油断していたのであわてたが逃げられず、仕方なく男を大急ぎで押し入れの中にかくして、たまたま赤飯があったのを男に与えておいた。権七は何か騒がしいのに気付いてあちこち調べ，押し入れをあけると,中の密夫は女房が赤飯にかける胡麻塩をくれるのだと思って菓子盆をつき出した。権七はただちに男を引出し、おろしたての包丁で斬り殺した。女房は殺される覚悟で「とてもこの世では添われぬ人だからせめて未来はあの世であの人と長く契ろう」と言って西に向かって手を合せた。すると亭主はなんと思ったのか女房を斬るのをやめてしまった。

---

[10] 耳袋，1:57。

[11] 墨水消夏録　p.222-223；江戸真砂六十帖広本　p.71-72。

その内に長屋の者たちが大勢寄りあつまって「お前はもう一人殺したのだから今更かくしてはおけないだろう。女房も処分してから訴へ出ろ」とすすめた。権七は頭をふって、「女房は今一緒に殺されて男とあの世で添うつもりなのだ。そうは問屋がおろさない」と言い張った。けれども男ばかり殺して女房を生かし置くのはどういうものだろう、と人々がいうと、何と思ったのか権七は其の場から逐電して行方も知れなくなってしまった。この事件の後、愚か者の事を権七と呼ぶことになったそうである。[12]

権七は間が抜けているかもしれないし普通の人と考え方が違っていたかもしれないが、女房を殺さなかった所は結果的には一応紳士的というか騎士的というか、江戸男にしてはめずらしく短気でない。しかし彼の理由は紳士であるからでも慈悲心があるからでもなく、あの世で女房が恋人と一緒になるのが口惜しいのである。そういう所に恨みがましく俗信を持って来た事が間が抜けているので笑われたのだろう。しかし女房はどうなったのだろうか。その期に至ってあの世で恋人と暮らしたいと首を差し伸べたのはよほど彼を愛していたのだろう。姦通の罪を問われたはずだから権七が殺さなくてもお役所で何らかの刑を受けたかもしれない。それにはかかわらないで権七の気の利かなさを流行語にしてしまったのはいかにも江戸人らしい。女房の運命はどうなったのか、と尋ねる人間は洗練されない田舎者だということだ。しかし間男が押入の中で赤飯にかける胡麻塩を待っていたというのには笑わされる。

姦通　２：　仕事師（土建人夫）の悪妻

神田に仕事師親分がいて毎日皆がその家に集まって仕事に出ることになっていた。ある日一人の男が弁当箱を失って誰かが隠したのだろうと尋ねたが誰も知らないので、仕方なく一人で腹を立てていた。結局その仕事師は面白くないので、今日は休むと言って近所の酒屋へ行って飲み始めた。すると傍に弁当を食べて居る男がいる。よく見ると間違いなく自分の弁当箱である。そこで弁当男をとらえて尋ねて見ると、親に勘当されて昨日から何も食わずに飢えていたが、思いがけなく河岸で弁当を拾ったのでありがたく食べているのだと白状した。男はあわれに思い、又今食い残しの弁当をたべたいわけでもないのでそのまま食べさせておいた。

それから用事を思い出したので男は家に帰ったが、留守のようである。男は何とか戸をこじ開けて入って行った。ところが女房は秘密の恋人を引き入れていたので大いに狼狽した。夫は「おのれ売女め、逃しはせんぞ」と大声で騒ぎはじめた。それを聞き付けた近所の者たちが駈け集まってその場の詮議をしていると、さっきの酒屋から今すぐ大急ぎで来てくれと言って使いをよこした。何の用かと問うと、さっきお前が弁当をやった男が頓死したのでお役所に訴へて出る所だ。お前は弁当箱の主だから一寸来て証言して欲しいということだった。

こちらでは密夫をとらえて混乱中、あちらでは不審な死人が出たと言う大取り込みになった。そこで事件は取り調べられ，姦通は明白になって密夫は牢に入れられた。しかし弁当の方はどうだったのだろう。姦通者たちの悪巧みで弁当に毒を入れたのか、又はあまり飢えているときに上等な弁当を食べたから頓死したか、双方同時に起ったさわぎで町内の混乱は例えようがなかったということである。[13]

常識で考えれば誰もが妻が弁当に毒を入れたと思うだろうし多分そうだったのだろう。仕事師が弁当を落としたのは幸運だったが、拾った男は運の悪い人である。幸運な人がいれば不運な人がいるのは世の中の巡り合わせでしかたがない。しかし毒入り弁当で夫を殺せると思った妻は悪女のくせにだいぶ頭が悪い。彼女は秘密が保たれる事をあてにしていたのだろう。密夫のことを誰も知らなければ少なくともしばらくの間は彼女を疑う者はいなかったかも知れない。

しかし毒で死ぬのと、空腹に急に食物を入れてショックで死ぬのとはいくら江戸時代でも見分けはついただろう。普段元気な仕事師が弁当を食べて死ねば必ず周到なお調べがあったはずである。それを思いつかなかった妻はよほど切羽つまっていたのだろうか。もし本当に起ったことならば、この結果

---

[12] 梅翁随筆、p. 67−68。

[13] 梅翁随筆、P．32。

はどうなったのか知りたいものである。作り話にしてはできすぎているから本当にあった事かも知れない 。

姦通 ３： 烏頭 （とりかぶと）

これも悪女の話である。薬種屋というものは砒素ハンミョウなどという毒薬も扱う。腫物その他病症によって、ほどこすと効き目があるのだが、その売り買いは軽々しくはできない。その他烏頭(ウズトリカブトの根)のような小毒の薬も人に害を与える事があるのでみだりに売買しないものである。

ある日浅草並木あたりの生薬屋の主人が近所に用事で出て居る留守に一人の女が来て烏頭のような軽い毒薬を望んだ。店に居た小僧が何気なくそれを売って主人が帰って来た時報告した。主人は大いに驚いてどんな風な女だったか，名前住所を聞いたかと訊ねたが、何も聞かなかった，年ごろ三十くらいの女で小さい丁稚を一人連れていた、と話した。薬屋はたいへん心配して浅草観音へ詣でて一心不乱にその薬が人に害を与えないように、人助けになるようにと祈った。その時となりで中年の男が熱心に祈って居たが帰り道でふと道連れになり、自分の心願の事などいろいろ話しかけるので、薬屋は今日起った事を話した。その男はその女客の着物や格好などの様子を聞いて「あなたは人が害を受けないように祈られたのですから感応がないはずはありません。ところでいつか私の家へいらっしゃいませんか」と言って別れた。

その男は自分の花川戸の家に帰ったのだが，店に干してあった浴衣を見るとおかしなことに薬種屋が描写した模様とそっくりなのである。考えてみると自分の妻の様子も年格好も毒薬を買った女と似ている。不思議に思っていると妻がおやつに餅菓子を焼いて茶といっしょに持って来た。少し不安になって「いい茶菓子だが後で食べよう。私は湯に入って来る」と言って小僧に浴衣手拭を持たせて風呂屋へ行った。そうして小僧を片隅へ呼んで「今日お上さんのお供をして何処へ行った。何か途中で買い物をしたか」と聞くと，丁稚は何も知らずに浅草へ詣でて薬種屋で薬を買った話をしたので男は感があたったことを知った。

湯に入ったあと浅草観音に参拝してから帰ると妻は又茶菓子を持ち出した。男は女房に「先ずお前から食べろ」と言うと好きではないと言う。それで男は「今日は思う事があるのでお前は親の家に帰りなさい」と言って菓子を重箱に入れ離別状を書いて，「離縁の理由はこの重箱の菓子です」と言って送り返した。その後男は薬種屋と兄弟の交わりをしていよいよ観音菩薩の信心に励んだという事である。[14]

『耳袋』の編集者鈴木棠三氏はこの話は同じ本の別の部分の「奸婦その悪を遂げざるの事」の話とほとんど同じである事を指摘している。[15] その話では浴衣のかわりに羽織、菓子のかわりに牡丹餅、女房の姦通の相手は番頭である。これは源を同じくする話を多くの人がそれぞれ違う人達から聞いたのだろう。それならば本当に起って有名になった事件の可能性が強い。

姦通 ４：白木屋お駒（あるいはお熊）

白木屋お駒は江戸時代の代表的悪女の一人としてよく知られていて、あちこちにその噂が出て居て落語や歌舞伎にさえなっている。川柳も（白木屋の跡もちやとは思いつき）とあるし、噂話としては『耳袋』や『江戸真砂六十帖広本』や『宝暦現来集』『十方庵遊歴雑記』『近世江都著聞集』などにも記録されている。

そのひとつ、『近世江都著聞集』 によると新材木町の富裕な材木屋白木屋正三郎の娘お熊はたいへん美しく、思い焦がれる者が多かった。お熊は歌舞伎狂言座の隣町に住んで芝居好きなので、朝夕八百屋お七や油屋お染の恋、大経師のおさんの道ならぬ恋などの芝居を自分の境涯にあててみて夢想にふけり、蓮っ葉な女に育っていた。母親のお常は非常に慾深く悪い女だったが、父親の正三郎は生来のうつけ者で商売は下手、世事にうとく世帯のことはお常にまかせきりだった。お常は夫のうっかりをいいことに財産を思い通りにわがままに使い、内証で密夫を作り、だてな衣裳を着飾り、娘のお熊だけで

---

[14] 耳袋、1：184−186。

[15] 耳袋、 1:345。

なく下女たちにも贅沢な衣服を着せ、今日は上野の花、明日は隅田川の船遊び、芝居の見物、物見遊山と遊び暮らし，彼女の奢りと高慢は誰の眼にもあまっていた。お常の悪評を江戸で知らぬものはなく、あだ名は「一つ印籠」というのだった。（江戸初期、印籠を一つだけさげるのが伊達とされた）。そんな母親の娘だからお熊は幼いころから衣裳、髪形の風俗はすべて芝居役者風で、わずかに浄瑠璃、三味線は少しできたが、他に正しいことは何一つ知らなかった。

白木屋の手代に忠七といって美男で頭もよい男がいた。商売上手で、町内でも白木屋の番頭としてもてはやされていた。お熊はいつの間にかその男と関係して忍び逢う仲になり、後には下女のひさの取り持ちで夫婦の約束さえした。そのうちにある人がお熊に似合いの婿養子を世話しようと言い出した。白木屋は女房の奢りがはげしかったので家内は乱れ、借金も山のようにたまって家産はひどく傾いていた。 正三郎夫婦はお熊と忠七の関係を知らなかったので、持参金を持って来る聟ならば考慮しようと言い出した。仲人は承知して大伝馬町の地主の手代又四郎を五百両の持参金で婿養子にすることをすすめ、忽ちお熊との婚姻がととのった。お熊は忠七と夫婦の約束をしているので色々悩んだが、芝居の世界しか知らないのでよい考えは出て来なかった。結局忠七と相談して、一旦又四郎と婚礼をして父母をよろこばせ、町内への披露もすませることにした。

持参金の五百両で商売も一時挽回でき、しばらく繁盛して月日が過ぎた。しかしもともと家に取り締まりがなく、亭主の正三郎は愚か者,聟の又四郎は実権をもらえず、母のお常はあいかわらず贅沢乱行、又四郎の妻お熊は手代忠七と密通を続けているので、下男下女も平気で情事にふけり、商売上の間違いは多く、金を着服して逃げ出す手代もいるし、番頭になった忠七は聟が来てからは遊女狂いで主人の金銀を使いまくり、白子屋の身上はまもなく底をついた。

親切な同業者の加賀屋長兵衛が二度も金を貸して忠告を与え、家を建てなおす援助をしてくれたにも関わらず、白木屋は誠実な友人の言葉を無にして結局は破産状態に落ちた。その間お熊とお常は養子の又四郎を憎んで彼を追い出す工夫をめぐらしたが、離縁すれば持参金五百両を返さねばならず、なんとか返金せずに追出す方法を考えたあげく、お熊と忠七は又四郎を殺して、世間には病死と発表してその後二人が夫婦になろうという計画に行き着いた。お常は自分の身持ちが悪いし、娘を不憫に思っているのでその企てに同意した。そうして又四郎が 一口食べるとすぐに死ぬほどの大毒を朝飯のなかに盛ることにした。

その計画をはからずも白子屋の下男の長介が聞き付けて、又四郎に朝飯を食べないように忠告したので毒殺計画は一旦中止となったが、金に行き詰まった白木屋はとうとう持ち家の角屋敷を前に忠告してくれた加賀屋に買ってもらうことになった。その代金をすぐに又四郎に返せば災いも逃れただろうが、正三郎の妻お常と番頭忠七はどうかしてその金を又四郎に返さずに離縁できないかと悪計をめぐらし、女中のひさを引き入れて若い下女のお菊に又四郎をカミソリで少しばかり疵つけさせ、又四郎がお菊と心中しようとしたのだと言いふらせば、持参金は返さずに又四郎を追出せるだろうときめた。お菊はその話を持ちかけられ、報酬に着物や金銀を約束されて、又四郎を少々傷つけることを請け合った。

ある夜お菊は又四郎の寝所に忍び入り,剃刀で彼の咽の辺りを少し傷つけた。彼はすぐに大声を上げてお菊を取り押さえた。人々が駆けつけた時又四郎はお菊をおさえたまま下男の長介を呼び、素早く町内、組合、家主等を呼び集めてこの仔細を全部語り、彼等の悪事はのこらず公儀に申し上げることにした。

当時の奉行の大岡越前守忠相がこの訴えを聞いたのだが、さすがの名奉行も額に皺を寄せるほどの複雑な企みだったとか。加賀屋長兵衛がいろいろ折衝して事を穏やかにすませようとしたけれども又四郎の親類が黙っていなかったので最後には有罪の判決があり、享保十二年(1727)十二月七日に事件は落着した。[16]

---

[16] 近世江都著聞集、 P.22-26。

白木屋事件罪状の判決の記録は『近世江都見聞集』にも曲亭馬琴の『兎園小説余録』にも大体同じ裁決が写されている。名前や齢は少々違っているが、下女きく(十七歳)と下女ひさ(三十二歳)が死罪、くま(こま)と密通した忠八(忠七)三十七歳が獄門、くま二十二歳は死罪獄門，母親つねは遠島、父の正三郎は江戸追放となっている。

姦通 5：淫婦小伝

あたりまえかもしれないが、江戸時代の人達は多くの男と関係を持った女性を嫌っていろいろ噂している。しかし一方それを面白がっている様子もある。天明寛政(1781−1800)の頃、 義太夫の名人で名高いお伝という女性がいたが、その門弟で師匠の名前を継いだ女性が「淫婦小伝」と言う名前で有名である。歌舞伎の三代目坂東三津五郎の妻だったのだが、もともと男好きで恋人は多かった。なかでも六代目瀬川菊之丞（三代目路考の養子）と密通した事実は世間の噂に高かった。

すると頭のいい人が思いついて、小伝の数々の男たちを浮世絵師歌川国貞の筆で描いてもらって密夫の「顔見せ番付」として出版した。市民はこの変わった趣向を喜んで大変な評判になった。しかし当然のことながらその浮世絵はまもなく版行販売ともに禁止となった。噂によると番付を刷るのに費用が金百両あまりかかったのだが、売り上げの儲けは二百両以上だったそうである。[17]

このように人々は女性の関わるスキャンダルは大好きで、そんな話となると瓦版でも浮世絵でも売れるのが確かだった。今でも醜聞でにぎわう週刊誌などが売れるのは昔と同じである。小伝も義太夫で暮らせたのだから醜聞が立ってもかまわなかっただろう。演芸界で悪い噂は少しも演技者を傷つける事なく、むしろ宣伝の助けになることは昔も今も同じである。

八幡の妻仇

敵討ちというものは退屈なものである。それは大体朱子学に固まっていた幕府の儒者達が人としての義務だと教え、親兄弟が殺された時仇を討たなければ人間でないように思わせたので江戸の人達は正邪おかまいなく仇討ちをもてはやした。誰かが人を殺す、すると殺された人の身内は敵討ちをする義務があると思い込んで、幕府の許可を得て長い年月仇の後を追廻し、何とかしてその人物を殺す。そうするとその人物の子供や兄弟が又仇を討つ義務を負わされるのである。それでは悪循環になっていつまでたっても殺人が絶えなかったのだろう。

ジャンジャック･ルソーは人間界の不平等の原因を論じた中でホッブスの『人間性悪』の論に反対して、人間は自然の状態で満足していればまず喧嘩をしたり殺しあったりする事はないが、社会が習慣的に生涯の結婚と貞節を標榜する社会では、貞節の義務という事が姦通を作り出し、法律がかえって放蕩や堕胎を増やしている、と言っている。[18]

日本では普通敵討ちの害については云々されなかったので悪い結果は見逃されていたようである。とにかく敵討ちはひとつの完結した事件として取り扱われ、小説や芝居によって美化された。

大阪の有名な豪商淀屋辰五郎は遊女吾妻を根引きして妻にした。しかし豪奢が過ぎて幕府の命令で大阪から追放されたので山城の八幡に屋敷田地を買い、下村故菴と改名して蟄居した。

後年夫婦が亡くなった後、 吾妻の生んだ幼女以保子が一人残された。以保子は生れつき美しく上品で見る人は皆どこの深窓の令嬢かと心を奪われた。彼女の周囲の人達が下村家を再建しようとして、四方田重丞という人の末子の右衛門を下村家の婿養子に取り、縁組させることにした。その時以保子はまだ八、九歳だったのでまだ結婚はしなかった。しかし何年か待つうちに右衛門の兄の孫七が以保子を自分の物にしてしまった。兄弟の父四方田重丞は世間に恥じて孫七に下村の家を継がせ、右衛門を取り戻して四方田の家を継がせ、名前も下村右衛門から 四方田重丞と改めさせた。

---

17 巷街贅説、　上：140。

18 *Discourse on the Origin of Inequality*, p. 57。

孫七は下村左中と改名して以保子と結婚した。しかし彼はならずもので博打にふけり、相続まもなく下村家の田地も財産も博打で全部すってしまった。左中は人々の意見を少しも聞き入れず夫婦仲も悪くなり、京都に出て放蕩博打に専念しはじめた。 親類知人は、そんな男に由緒ある下村家を相続させられないと、集まって相談して離縁の話を左中に持ち出した。左中はもう養家の金を使い切った後なので承知したが、離別状は書かなかった。 以保子は佐伊と改名した。

一方、八幡の町に剣術の指南に来る大野左門という浪人がいたが、独身なので土地の壮士たちが左門に下村の跡目を継ぐ事をすすめ、以保子との媒酌をしようとした。左中は下村の家を捨てて帰らないので以保子のためにもいいだろうという事で、左門はその家を稽古場にして多くの弟子に出入させ、後には左門はそこに泊るようになった。

左中は京都でその噂を聞いて、まだ以保子を離縁していないので不法狼藉だといって怒った。加勢する者も相当いたので、左中は大野左門が八幡の家にいるのを確かめてから忍び入り、左門と以保子(佐伊)が寝入っている所を襲った。元文二年(1737)の正月のことであった。左門も兵術師範の者だから名乗り合って闘えば打たれるような事はなかっただろうが、深夜熟睡中だったから一刀に撃たれてしまった。 佐伊は正しく座って首を打たれたそうである。

お調べがあった時、左中がまだ離縁状を書かないうちに佐伊が他の夫を入れた事を言い立てたので、この殺人はふつうの妻仇として扱われてしまった。けれども左中の世間の評判は非常に悪かった。この話を大阪芝居で「淀鯉金の鶏」という狂言に仕立て興行すると大当たりになったそうである。

五六年して京都で博打の取調べがあり、博打の親分格だった左中は島流しになり、十年後の赦免で帰洛したが親類一同は左中と付き合わなかった。後に左中は浅ましい様子に落ちぶれて七十余歳で亡くなったそうである。[19]

大体同じ話が「在阪漫録」にも出ている。しかしその著者久須美**祐**雋は妻仇の日が元文元年(1736)四月だったと書いている。[20] この久須美祐雋は大阪の西町奉行だった人で「妻仇」について一応の見解を持っていた。彼の考えによると、姦通の原因は妻のふしだらであり、夫の訓戒が行き届かず妻の淫乱に無知であることから家庭がみだれたのだから、夫が妻仇をとっても納まる事ではない。しかし昔は妻の姦通を見逃す事は恥であり、見逃すこと自体が人々の非難を受けた。今の時代はただ事件を穏便にすますことばかり考えて世間の嘲笑を恥じる事もないほど士風は完全におとろえている。今は 姦通が露顕しても離縁するだけで姦夫を罰する事もない。あまつさえ姦夫を捕まえて賠償金を払わせる風習がさかんになって，甚だしいのは夫婦で計画的に姦淫して金を取る手段にしている。大阪でしばしばその例がある，と書いている。

久須美が西町奉行として扱った姦通事件の一つでは、夫が姦夫を見つけて殺してしまい，妻は逃げて行方不明になったので、夫は姦通の証明をする事ができず入牢した。妻はその後厳しい捜索で捕まり姦通に相違ない事がわかったので、夫は出牢し妻は死刑になった。しかしこれもその夫が相当な商人だったらきっと離縁で穏便に解決しただろうが、普通の男だったので何の考えもなく姦夫を殺してしまった。久須美はそれをいさぎよいと評している。その女は美人というほどではなかったが十人並で，年も二十六、七だったので、獄卒どもが「この女を売ればきっと金が儲かるだろうに、首を落としてしまうのは惜しいなあ」と言ったと聞いて久須美は笑った。

また、久須美が子供のときに祖母から聞いて忘れられないという話を書いている。祖母の家に出入りした屋根屋は人品のよい男だったのに、その妻は二目と見られぬ醜い女だったので、祖母がなぜかと問うと、「屋根屋というものは毎日外に稼ぎに出て、家の事は妻に任せっきりです。家には年中弟子を五六人置いているから、妻が美しければ弟子に不義を教える事になります。だからみっともない妻を貰ったのです」と答えたそうである。久須美はその職人の考えを卓見だと褒めているが、不義予防対策のために嫁にもらわれたと知ったら妻は怒ったことだろうし，そのために醜い妻をめとるなど本末顛倒ではないだろうか。

---

19 翁草 5:310-312。

20 在阪漫録、299-301。

長屋の放屁けんか

これは江戸時代の狭い貸しだなの様子がまざまざと想像できる話である。

十九世紀の始め、ある長屋に独り住まいの男がいて，その隣は夫婦と七歳くらいの娘の三人暮らしだった。ある日夫が留守の時，妻が長屋中響き渡るようなおならをした。隣の独り者が、「女のくせに人もなげな屁だ」とあざ笑ったのを女房は壁ごしに聞いて忽ち大腹をたてて独身者の家へねじ込んだ。「自分のうちで屁をひって何がわるい、おおきなお世話だ」とののしったことから大げんかになり、大声のわめき合いを聞いた長屋の者たちが集まって引き分ける始末となった。

事は人々の仲裁でなんとか納まったが，女房が銭湯へ行っている間に夫が帰って来ると，娘が「ととさんの留守の間におかしな騒ぎがあったよ。隣のおじさんとかかさんが口げんかをしたよ。けれどもととさんには決して言っちゃいけないよとかかさんが言った」と告げた。夫はさては姦通したな、と心中怒り、女房が帰って来るなり、一言もいわず出刃包丁で妻の頭に疵を付けた。金切り声に近所から人々が駆けつけ，隣の男も来て取り押さえようとするとそれにも疵をつけ、あわや殺人沙汰になる所だったが、よくよく聞いてみると、何ともつまらない発端だったので，竜頭蛇尾、意見だけでことなくすんだそうだ。[21]

裏店のひとつひとつのユニットは幅九尺に奥行き二間くらいの大きさだったから隣で起ることは筒抜けに聞こえたのはたしかである。けんかも悪企みも他人の悪口も耳をすましていれば全部聞こえたに違いない。どこかで騒ぎやけんかがあれば、長屋中がすぐさま駆けつけて来るのも必定であった。トラブルは向う三軒両隣が連帯責任を負わされたから、無視するわけにはいかなかったのである。しかし隣の独身男が中年女の人もなげな大音放屁を批判する話はおかしい。それを怒ってねじ込んで来る女房はもっとおかしい。子供は無邪気でおとっつあんの味方だから、言っちゃあいけないよといわれてもすぐにしゃべってしまう。何か報告することがあれば必ずするのである。それを事情も聞かないで、ものもいわずに女房に斬りつける男もいかにも江戸っ子らしい短気者である。これはちょっと落語めいているが、実際はいかにも本当に起った話のようだ。

怪談−ろくろ首

ろくろ首の噂も相当あった。日本には──中国が本家であるが──昔からろくろ首というものがあって、化物の話になると必ずろくろ首が出て来た。江戸時代のお化けのリストでもいつも見越入道、一つ目，三つ目、ろくろ首、という連中が話にも絵にも出て来る。そうしてろくろ首はいつも妙齢の美しい女である。 男のろくろ首というのはたまにしか聞かない。見越し入道が必ず男であるのとバランスが取れている。これらの化物は何となくユーモラスで可愛らしい。お岩の幽霊やかさねの幽霊のようにこわくない。

ろくろ首：1　下女の首

これは『北窓瑣談』の著者の橘南谿に友人の越前國敦賀原仁右衛門という人が語った話である。仁右衛門と妻の千代には二歳になる男の子がいて、千代は夫の留守中子供を見守っていた。主人の留守の間寂しいのでいつもいる下女の他にもう一人二十六七歳の下女をやとった。

寛政元年(1789)の十月の有る夜中に、その新しい下女がものすごいうめき声を発した。 千代は眼を覚ましたが、その女中が痰の出る持病を持っていることを知っていたので、また痰だろうかと思って様子をうかがった。枕もとの行灯の火が消えていたので、子供を抱いて火打石で灯をつけ、下女が寝ている次の間の障子をひらくと、その枕元の小屏風の下に何か丸いものが動いているのが見える。灯りを向けてみると、下女の首が伸びてくくり髪のままで屏風の下から、一二尺づつ屏風を登っては落ち、登っては落ちしているのだった。

---

[21] 耳袋、2:80。

千代はおそろしくて気絶しそうだったが、子供を抱いていたので、落とさないように右手で子供を抱え、左の手に有明の灯りを提げてそのままそこに居座った。というより動けなかったのである。しばらく千代は声も出せずに見つめていると、下女の首は何度も屏風を登っては落ちた後、ついに屏風をこえて向こう側へ消え、又うめき声が聞こえて来た。千代はもう一人の下女を起こす事も出来ず、そのまま障子を閉めて自分の寝床にもぐり込み、布団をひっかぶってただただ夜が明けるのを待っていた。

夜が明けるが早いかすぐに里の大阪屋へ使いを送って兄の長三郎に来てもらい、昨夜の事情を語った。そうしてこの女中には他のことにかこつけて暇をだした。その女は仁右衛門が留守の間だけに雇った近くの町の者だったから、千代は女中の評判を守るためにその事を深くかくしたが、夫には手紙で告げた。

そのうちに千代も京都の夫のところに登って来たので、話の記録者の橘南谿も委しい話を聞く事が出来た。ほんとうにろくろ首を見たというのだから奇怪である。橘が考えるに、ろくろ首というのは妖怪ではなくて病気なのだろう。痰が多く出る人は陽気が頭にのぼってその気が形を結んで首から上に出るのだろう。その人が寝ているのをみると本当の首はそのまま身体についているはずだからこれは離魂病の類なのだろうと書いている。千代は下女の首が身体とつながっていたかどうか見なかったと語った。[22]

この話を記録した橘南谿という人は十八世紀半ばの医者だった人で、 医書を書いたり死体を解剖したりした人である。西洋医学に相当な科学的興味が出て来た江戸後期に、何事もそれなりに知的に解釈しようとしていたらしい。だから痰が多く出ると陽気が頭に昇って云々というような苦しい説明をしている。離魂病のたぐいというのもただのお化けだと思う普通の人の考え方を避けるために苦労しているので少々気の毒である。しかしもしこれが本当にあったことならば現代の読者はどう解釈すればいいのか判断に困る。

ろくろ首 ２：養子さがし

宝暦(1750)年代に神田佐柄木町にわずかな資金で貸本屋を出して世渡りをしている男がいた。其の人が不思議な幸運に恵まれた話である。そのころ遠江に田地を六十石持って、雇い人も多く使っている裕福な百姓がいた。非常に美しい娘が一人いたが、ろくろ首だという噂がたっていたので、十六歳をすぎてもなかなか婿に来てくれる者が見つからなかった。両親は嘆いて貧乏な家からでもいいから婿を取ろうといろいろ苦労したけれども承知する者はいなかった。娘がろくろ首だと言っても父母は見たこともなく、娘にたずねても「たまさかに山川を見回る夢を見た事があるから、そんなとき私の首が抜け出たのだろうか」と言う程度だった。証拠は何もないのにその村は勿論、他の村々までその評判がひろがっていたので縁組みはととのわず、 家の断絶が予想されて父母は嘆いていた。 娘の伯父で江戸表に年々商売に行く人がいて、「養子は江戸でさがしてみよう」と言って或る年江戸の旅宿でいろいろの人に話したが，誰も養子に来ようと言うものはいなかった。

伯父が旅のつれづれに佐柄木町の貸本屋を呼び入れたが、それは容貌や振舞などなかなか好ましい若い男だった。伯父が姪の縁談の話を持ち出してすすめると「私はこんなに貧しい暮らしをしていて，親類も貧しいので支度もできません」という。伯父は「支度は私達がするからとにかく一緒に来てごらん」とすすめた。「財産が相当あって娘さんの器量がよくて支度もいらないというのは他に何か訳があるのでしょう」と男がしきりに訊ねるので、「何もほかに訳はない。ただろくろ首だと人が評判しているのだ」と言うと「ろくろ首などというものは実際にあるものではありません。たとえ本当でも怖れる事はありません。私が婿になりましょう」と答えたが、一通り家族親類と相談の上で返事をすると言って家へ帰って行った。

この若者は色々考えてみるとさすがに先のことが心配になったので、かねて心安くしていた古着屋の番頭に話すと「この世にろくろ首などありはしない。たとえその病気があったとしても怖れる事などない。考えてみろ、今小さな貸本屋をして生涯を送って何になる。情けないじゃないか」と忠告した。そこで若者も決心して娘の伯父の所へ承諾に行くと相手はたいへん喜んで，衣類、脇差、その他のたい

---

22 北窓瑣談　97−99。

そうな支度をして若者を國へ連れて帰った。娘の両親も大喜びで貴客のように大騒ぎをして迎えてくれた。

もとより娘はろくろ首のような怪しいことは少しもなく，夫婦はめでたく栄えたが,まだ多少の疑いがあったのか、両親が江戸へは行かせてくれなかった。それだけが辛いと婿は古着屋の番頭の所へ手紙で書いてよこした。しかし十年程過ぎてやっと江戸へ出て来て「子供も男女ともできたからでしょうか，やっと江戸へ来る許しが出ました」と古着屋へも来て、昔のことを語ったと言う。この事を『 耳袋 』の著者、根岸鎮衛に話した森本翁はそれを古着屋の番頭から聞いたそうで、昔佐柄木町に住んでいた貸本屋の若い男も覚えていると語った。[23]

ろくろ首 3：遊女のろくろ首

轆轤首というのは一種の奇病だとされている。これは確かにそれを見たと証言する俳諧師の遊蕩一音という男が語ったことである。彼が若いとき江戸吉原で一人の美しい遊女を見てすぐに揚げてあそび、朝帰りに友達の所へよってその美貌の遊女と寝たと自慢すると、集まって居た若者たちが皆手を打って笑い出した。なぜだと聞くと「お前は知らないのか、あの女はろくろ首だという噂がある。何かあやしいことはなかったか」と尋ねた。一音は冗談だと思って口争いをしたが、友人が皆「噂を聞くのが遅すぎたなあ」と笑うので、ほんとかどうか見定めよう、とすぐに吉原へ引き返した。

一音は渡部綱が羅生門におもむいたときの気持ちはこんなだったかと自分ながら滑稽に思って行ったのだが、その夜は遊び戯れて酔っぱらって眠ってしまった。 一音はこんな風に寝こけて明けてから帰ったのでは又笑われる、とその日もそこに居続けた。そうしてその夜は酔ったふりをして一睡もしないで様子を伺っていると、遊女は心を許したらしく熟睡してしまった。夜半過ぎる頃、目を開けてみると、女の首が枕を一尺ぐらい離れて垂れている。 覚悟していたことながら、一音はわれ知らず大声を上げてしまった。すると寝ずの番の男がすぐさまかけつけて一音の口をふさぎ、「お客さまが賊に襲われた、皆の衆来て助けてくれ」とわめきたてた。みんなが出て来てさわぐ中にろくろ首のことはまぎらかされてしまい、その遊女はいつの間にか消えて、そのかわり大勢遊女たちが出て来て一音を慰め酒など勧めて夜を明かした。

朝になると家の主人が一音を厚くもてなして、たいそうなご馳走を出した。それから声をひそめて、「あやしいとお思いになる事があったかも知れませんが、決して他言なさいませんように深くお願い申し上げます。悪い評判が立ってはこの家は潰れてしまいます。それが私どもの大きな心配でございます」と丁寧にたのんだそうである。[24]

その後伴蒿蹊は大真面目に、ろくろ首というものについて、なるべく科学的に解釈しようとしている。彼はその症状を考えてろくろ首というのは病気ではないと判断して、 首の皮が轆轤のように屈伸する性質で、それは心が緩んだときに起るのだろう。もちろん飛頭蛮の話のように数丈伸びて長押（なげし）に登るというような事はあり得ないといっている。しかし首の皮だけ伸びても首は曲がって垂れたりしないだろう。頸骨はどうなっているのだろうか。第一そんな事が実際にあるはずがない。

西洋ではろくろ首の幽霊などないようだ。南米や東南アジアには似たような話もあるようだが、やはり出所は中国である。飛頭蹌とか轆轤頭とかいって中国の古い博物誌に出ている。たしかに中国の怪談にも美しいお姫様と契った若い男がお姫様が轆轤首なのを発見する話があった。だがろくろ首に人気が出たのは江戸時代で、多分中国の話を翻案した江戸小説から有名になったのだろう。ほっそりと首の長い女性はエレガントで好ましいのだが、それも長さによる。普通より五センチ以上長過ぎたらやはり異常である。そうして一つ目小僧や見越入道と並べてこそ面白いが、ろくろ首の美しい娘だけが出てきたらぞっとするにちがいない。

---

[23] 耳袋、1:349-351。

[24] 閑田耕筆、 P．219。

因みに豊芥子が、文化十年(1813) 6 月にろくろ首の芝居が森田座でかけられて大当たりし、二ヶ月後には市村座で興行して又大評判になった由を書いている。ろくろ首役を演じた尾上松緑はその時七十歳だった。蜀山人大田南畝が芝居を見に行って呼んだ狂歌：

たれもかもろくろ首を長くして夏狂言を松の緑子[25]

ろくろ首４：犬の仇

常陸の百姓作兵衛の妻の喜久は大病で医薬も加持祈祷も効かず日増しにおとろえていった。するとこの村にいつも来る商人が「こんな病気は白犬の胆を取って呑めば忽ち治るそうだ」と教えた。その話を作兵衛が飼っている白犬が聞いていたが商人が帰るとき門の所に寝たまま商人を鋭くにらんだので，商人は鳥肌立って引き返し「犬よりは雉の胆が格別利くそうだ」と言い捨てて逃げて行った。その白犬はしばらく見えなくなって、五六日後にどこからか雉を一羽くわえて帰って来た。しかし主人はそれに気づかずに夜の間に犬を棒で殺し、その胆を妻に与えると忽ち病気はよくなった。

妻はすっかり回復して二三年後には娘を一人生み，夫婦で大切に可愛がって育てた。成長すると娘はたぐい稀な美人になったのだが，近所の評判では作兵衛の娘はろくろ首だ，誰それが墓場で見た，誰それは川下の渡場で見た，という噂が立った。しかし親たちはそれに気づかなかった。この十月中旬、ある夜娘の首が抜け出て井戸の辺を遊び回っていた時，どこからか白犬がかけて来てその咽に噛み付いて殺してしまった。 報いというものは恐ろしいものである。[26]

なぜ白犬の報いがろくろ首になったのか、その関係はわからない。ろくろ首に生まれた事が一応第一の罰と考えられる。そしてその上に第二のもっと厳しい罰で娘は食い殺されたのだ。これを見るとろくろ首というものは罰にあたいするのだから決して褒めた物でもないし普通の自然現象だと考えられてはいなかったのは確かである。その原型の飛頭蛮（ひとうばん）は、中国の妖怪であって古典の記述によれば、通常は人間の姿と変わりないが、夜になると頭部だけが胴から離れて空中を飛び回るといわれている。全くの作り話ではあるが気持ちのよいものではない。人間が考える事は今でも小説や劇や近くは映画やアニメなどでも素晴らしい想像力、創造力だと思うものがあるがそれが定着して一つのアイコンになってしまうものはやはり大多数の人々に愛好されたり感嘆されたりしたものである。ろくろ首や一つ目三つ目などの化物も誰かによって想像され、感心され、定着したものだろう。

幽霊

幽霊の話は江戸時代にいやというほどあった。夜が今日より暗かったのは明るい電灯や都会のイルミネーションがなかったので当たり前であるが、環境が暗い事と幽霊の話は密接な関係があって、現代のホラー映画でも幽霊は明るい所などには出て来ない。だから今日の明るい都会で幽霊話など聞かないが、ホラー映画が好きな人は絶えないので、相変わらず幽霊映画やホラー物が多量に製作されている。一般の視聴者は怖ければ怖いほどいいと思っているらしい。その背景は大体暗い夜である。普通のテレビや映画のアクション物でも、少し怖いシーンは必ず暗いのである。

幽霊奇譚　1：お角違いの幽霊

駒込あたりのある医者は信州の人で、軽井沢とかで飯盛をしていた女を妻にしていた。美しくもない女なのでどうしてそんな女と一緒になったのかと、その医者をよく訪ねる与住は不思議に思っていた。与住というのはこの話を記録した根岸鎮衛の知人である。

ある時その医師と同郷の財産家が娘を連れて相談に来た。その父親の望みでは、娘を大名の奥向きへ部屋子として出し、ゆくゆくは行儀見習いのためにその邸で奉公をさせるつもりである。江戸には

---

25 豊芥子日記、上：333-334。

26 甲子夜話続篇、２:152-153。

親類も知人も多いが、町人よりは医者の家から出せば人聞こえもよいだろうから、是非娘をおいてくれ、としきりに頼むので医師は承知して娘の身元保証人になった。

（ 大奥や大名の奥では正規の女中たちが、「部屋子」という少女を自分の召使いとして給料を払ってやとう。大奥では其の為の費用が女中の給料のなかに含まれているのである。部屋子は成績がよければ正規の女中に昇進できる。高級武家奉公は身元が大切なので、多くの若い女たちは旗本の養女にしてもらったり，身元を保証してもらえる人の所を宿として奉公にでる。）

その娘は一応武家奉公をしたのだが病気になって医者の家に帰って来た。すると医者は治療をするうちに娘と関係を持ってしまった。医者の妻は元来田舎の飯盛なので頼りにできる人は誰もいず、捨てられることをしきりに心配していたが、ある日突然家を出てしまった。医者は驚いて方々探し歩き，妻が両国川に身投げしようとしている所をやっと見つけて連れ帰った。医者は妻を思い違いだと叱りつけていさめたが、五六日すると、妻は二階へ上がって夫の脇差で咽を貫いて死んでしまった。 医者は仕方なく野辺送りをして妻を弔ったが，その家にいるのがいやになって、諸道具を据え置いたまま売って他所へ移った。

その家をある座頭が買い、金を二三十両出して普請造作をして引き移った。ある夜座頭の女房が目をさますと屏風のてっぺんに色青ざめた女が両手をかけて中をのぞいている。妻は驚いて大声で夫を起こしたが、彼は盲人なので何も見えず、「新しい家に移ったので心の迷いからそんな幻を見たのだろう」と説教して眠ってしまった。しかし三日も続けて同じ事が起ったので、妻は堪え難くて又夫にうったえた。盲人がどうしようかと隣人に訊くと、先の持ち主の医師の妻が自殺した次第を語って、そんな事があっても不思議ではないと話してくれた。

座頭も怖くなったのだろう，そこを早速引き払って転宅をしたとか。「幽霊は心残りがあっても医師の所へ行くべきだったのに、わけもしらない座頭の所へ出るとは、霊魂にも心得違いがあるものだなあ」と此の話をした与住が語った。[27]

これは後味の悪い話である。根岸鎮衛の所に出入りする与住の知人の医者に起った事だというのだから根拠のない噂ではなく、本当に女関係のもつれから医師の妻が自殺したのだろう。著者も話し手も医者の家を買った座頭を知らないらしい。怪談めいているが途中から話が方向を変えてしまうので筋が通らない。幽霊がその家を覚えてはいたが、自分の夫を覚えていなくて人違いの夫婦に出て来たというのはおかしい。しかし幽霊というものは俗説によると事件の起こった場所に執着するものらしい。

一方身寄りもなく、普段からコンプレックスを持っていて簡単に死んでしまったという女はあわれである。一旦家に連れ戻されて又脇差しで咽を突くくらいなら、河で身投げして死んでしまった方がまだよかったのではないか。幽霊になって出て来た気持ちもわかるが幽霊がお角違いをしたという事が霊界の出来事としては滑稽である。それで医師と関係を持った財産家の娘はどうなったのだろう。

どちらにしても階級制度の時代の女性たちは辛い思いをすることが多かった。

幽霊奇譚　２：心の病

駿河台に住む幕府の医者の草履取の関助は身持ちの悪い好色者だった。口はうまかったので柳という気だてのよいきれいな旗本の家の下女を言いくるめて関係を持った。彼女の親元は相応な律儀な百姓で、娘を田舎の自堕落な風俗から守るために奉公に出したのだった。柳は末は関助と夫婦になるつもりでいたが関助にその気はないらしく、柳が親里から数多く持って来た衣類なども彼に一枚ずつ巻き上げられ、全部売られてしまった。

関助は医者の家を首になったので、あくる年の奉公人の交代の季節に二人で仕事を探して同じ家で働くことにした。新しい勤めは少身の家なので人目も少なく、規律がきびしい旗本の家と違って自由に逢うことが出来たので柳はそれを楽しみに働いていた。しかし不用意から妊娠してしまい困っていると、関助が怪しげな堕胎薬を持って来て無理にすすめて飲ませた。その薬を飲んだ柳はたいへんに苦しんだ。主人は心の良い人だったので憐れんで世話をしてくれたが、助かる望みもなさそうなので柳を里

---

[27] 耳袋、２:42-43。

へ帰した。田舎の親はその理由を少しも知らずに普通の病気だと思って看病しているうちに、娘は十日ほど昼夜苦しんでから亡くなった。

その夜から関助の部屋に毎夜々々柳の幽霊が来て、「関助どの、関助どの」と枕元によって来て「お前のおかげで非業の死をとげた、その時の苦しみがお前にわかるか」などとかきくどいた。関助はうるさがって草履を作る横槌をなげたりした。傍輩の中間たちが怪しんだのでありのままに語ると彼らは気味悪がって仕事をやめてその家を出てしまった。関助は一人になって毎夜横槌で部屋中叩き回っていたが、元気だった体が次第におとろえて来た。その家の用人が不憫に思って「お前は毎晩幽霊に苦しめられると聞いたがそれは幽霊ではない。女をむごい目にあわせたことで、心の中の怖れが死霊の形になって目に見えるのだ」と説いた。

その後も主人が帰依していた禅僧に厄払いをしてもらったりしたが少しも効能はなく、 幽霊が来ることは毎晩続いた。禅僧は「もともとお前の心の中に霊がいるのだ、外から来るものではない」とさとしたのだが、文盲の中間のことだから何も理解しなかった。

ある時用人が関助に亡霊の様子を尋ねると「いつも外から入って来て枕元に立って私の顔に冷たい頬をこすりつけたり手を捕らえて色々恨み事を言います」と答えた。「それは狐か狸の業だろう、もし今夜来たら連れて来い」と用人は言いつけた。その夜中に関助は用人の戸を叩いて幽霊を連れて来たと言ったが用人が刀を腰に差して出てみると関助が一人で立っていて、今までしっかり幽霊を捕らえていたがどこかへ行ってしまったと訴えた。用人は大いに叱りつけて関助を帰した。その後もいろいろためしてみたが、関助はやせ衰えるばかりなのでとうとう暇を出された。幽霊を避けるために大坂のお番衆について関西へ昇ったのだが幽霊は東海道の泊り宿にも、大坂城内までもついて来た。それを気にやんだ関助はとうとう大坂で死んでしまった。[28]

関助は節制も自制もない好色の食わせ者だったわりに気は小さかった。幽霊は心の怖れが形を取って出て来るのだという禅僧の言葉は多分真実に近かっただろうから、関助は自分で気病みを嵩じさせて死んでしまったのだろう。悪い事をして人を死なせれば死人が恨んで幽霊になって出て来る、と信じていれば幽霊の幻を見る事もなきにしもあらずである。

お柳のようなきれいで気だてのいい若い女たちが、何人男にだまされて同じような目にあっただろうか。人口が二百六十年以上も大体同じ数(三千万から三千五百万といわれる)でとどまっていたのは、胎児や乳児の死亡率が非常に高かったからでもあるが、江戸時代に計画的に中絶や堕胎が行われていた事も貢献している。成人の寿命も今のようには長くなかったが、出産で亡くなる女性も多かったし、堕胎や中絶で亡くなる女性はもっと多かっただろう。お柳のような死に方をした女性は大勢いたと思われるのに同じような理由で出て来る幽霊がもっと多くなかったのが不思議なくらいである。ということは罪悪感で苦しんだ男が少なかったという事なのだろうか。

幽霊奇譚　３：先妻の恩返し

夢は正夢と言う言葉があるが夢で見た事が本当に起ったと言う因縁話のような挿話は世界のあちこちにある。堺町松坂七兵衛の後妻が俄に発作で亡くなったので、人々は灸針や湯薬の手当を尽くしたが全然効果はなった。しかししばらくして思いがけず息を吹き返した。どんな気持ちか、と七兵衛が聞いたところ、「なんだか夢の中のように茫然としていましたが、怖い鬼が三人現れて私の髪をつかんで引き立てて行きました。何をするのと泣き叫んだのですけれど聞き入れてくれませんでした。そのうちに果てしない荒野のような所へ出ますと、年とった女性が急に現れて白い長い布で四面を打ち払ったので、悪鬼たちは恐れて消え失せました。「本当にありがとうございました。おかげさまで助かりました。御助け下さったのはどなた様でしょうか、」と尋ねますと「私は妙壽です。二人の子供を大変可愛がってくださる事を冥土で有難く思っています。これからも慈愛深くお世話を御願いします」とねんごろに言ってから「ここは冥界です。早く娑婆に御帰りなさい」といって袖の中から黒い粉を出して私の口に入れると同時に私はよみがえりました」と答えた。七兵衛の先妻に子供が二人あったのだが妻は元禄十

---

[28] 怪談老の杖、 p。16-18。

五年(1702)に病死した。後妻が二人の継子を大切にしてくれたので先妻の霊が出てそれを謝し、一旦死んだ後妻を生き返らせてくれたのであった。[29]

この話とは反対に、先妻の幽霊が自分の生んだ娘を案じて出て来たと言う話もある。これは『耳袋』に出ている話であるが、著者の根岸鎮衛は、『むかしばなし』を書いた只野真葛の父親の工藤平助（仙台公の医師）が語ったことだと断っている。工藤は医者ながら若い時三味線を好んで弾いていたので、ある武家の娘に頼まれて三味線を教えたことがある。その娘が結婚した男性の先妻が、赤ん坊の娘が二つになったころ出て来たのだそうである。気丈なその婦人が「娘は我が子同然だからあなた以上に可愛がっていますから安心していて下さい」と言ったのでその後再び幽霊が出て来ることはなかったと言うのである。[30]二度出て来たのだが、ものを言うことはなかったらしい。これなど若い女性がその三味線の先生にでたらめな話をするとは思えないのだが、幽霊が必ず存在すると言う証拠にもならない。

幽霊の話はいくらでもあるから偽幽霊の話を一つ紹介しよう。

偽幽霊

近い頃、板木彫の松五郎というまだるっこい男がいた。妻を迎えたのだが，彼女はまもなくわずらって亡くなってしまった。涙にくれて毎日を過ごしているうちに、ふと思いついたのは、越中の立山という処へ行けば亡くなった人に会えるという言い伝えである。どうかしてもう一度亡妻に逢いたいと思っていたので嬉しくなって早速家財を全部売り払って旅に出た。（これはまだるっこい男にしてはたいした決断である。というよりやはり少し間抜けていたのかもしれない。）

立山のふもとの家に宿って、そこへ来た理由を宿の主人に語ると、「よく思い立っていらっしゃいました。昔から此の山に登る人は必ず亡くなった人に会えるのです。今夜いい時分に御案内しましょう」と言ってくれたので松五郎は喜んで待っていた。

夜十時頃になって主人は「もういいでしょう、山にお登りなさい」と言った。教えてもらった通り、道すがらお堂や祠で念仏をとなえながらさまよって行くと、どこからともなく白い衣を着て髪を長くたらした女が現れた。そら出た、私の妻だと松五郎が近付こうとすると女はすーっと逃げてしまう。松五郎が遠ざかると幽霊は又近付いて来る。それを繰返してらちがあかないので、傍の杉の木の蔭にかくれて様子を伺っていると、幽霊はそれとは知らずに近くへ来た。松五郎はここだ、と思って駆け出し、ああ懐かしい、あえて嬉しい、と抱きつくと、幽霊は驚いて振り放そうとするので松五郎はしっかり抱いて放さなかった。幽霊は逃げられなくてふるえながら、「ごめんなさい、ごめんなさい」といったが、その声は妻の声ではなかった。

松五郎はがっかりして「お前は一体なんだ」となじると、幽霊は小さい声で「私はあなたがお宿りになっている家の女中ですが、主人が今晩あなたのゆかりの幽霊になって出るようにと厳しく言い付けましたので、ことわり切れずに出て参りました」という。

折から空に澄み切った月が昇って来たので木の間を漏れる光りで幽霊の顔を見ると、年は二十歳くらい、目元は上品で髪も美しく、たおやかな腰のあたりなど夜目にもあでやかに見えたので、松五郎は心を奪われていつの間にか死んだ妻のことなど忘れ果てて女に戯れかかった。

さすがに女はたじろいだが、ほほえみながら落ち着いて言った。「男の心はあてにならないと聞いていますのに、亡くなられた御連れ合いを慕ってはるばるお江戸から越中のお山までいらっしゃったお心には感じ入りました。そんな夫を持った方はほんとうにうらやましい。」

そんなに言われると男はまたうきうきして、いろいろ話し合っているうちに夜も更けた。女は「こうなったからにはどうぞお江戸へつれて行ってくださいませ。ちゃんとした仕事もないので、わず

---

[29] 元禄宝永珍話、p. 296。

[30]耳袋、2:94-95。

かなお金のために幽霊に化けるようなばかな真似をしました。生きるのはつらい仕事です。私は親もなし、育てる子もいません。 私の身体をあなたにお預けしましょう」と言った。

松五郎は暁ころ女を連れて立山をしのび出て江戸に向かった。しかし帰って来ても先に家財を全部処分してしまったので、 以前から親しかった両国の書店山田某に保証人になってもらって、女を医者の家へ雇い女として出し,自分は山田の家に居候をして版木を彫ることにした。二人ともよく働いたので、ほどなく家を買って夫婦むつまじく住めるようになったという。この話はその隣の玉竜堂の主人が語ってくれた。[31]

著者が始めにまだるっこい男だと言ってくれたのであまり期待はしていなかったが、宿屋の亭主にだまされたのを怒りもしないで、会ったばかりの女を江戸に連れて帰るような男だからたしかに賢明ではない。宿屋の主人は立山へ行けば必ず亡者に会える、という噂とその証言が広まれば、もっと旅人が来てくれるだろうという宣伝を見込んで偽幽霊を仕立てたのだろう。昔も今も自分の利益のためにウソをつく商人は後を絶たない。しかし立山を後にした夫婦が頑張ってよく働いて家が買えるほど豊かになったのはよろこばしいことである。

骨董珍品１：天国の剱

京都一條の研屋長右衛門の持ち家に、殊のほか貧しい老婆が住んでいた。長右衛門はその老婆が子供も孫もなく、他にも誰も頼れる人がいないのを憐れんで，時々銭を貸してやったり物を恵んだりしていた。ある日老婆が一つの古い錦の袋を持って来て「これは先祖から伝わった大切な物だと聞いています。 私はもういつ死ぬかわからないのにこれをゆずる者もいません。中身は何なのかも知らないのですが，御恩返しをしないのも心残りですからこれを差し上げます」と言った。

家主は「これは思いもよらぬことだ。お前さんに物を貸したからと言って何か取る気など全然ありはしない。何か知らないが我が家には用のない物だ。持って帰りなさい」と言ったけれど，老婆は聞き入れずに錦の袋を投げ出して帰ってしまった。

その後何年かして老婆は亡くなったが弔う人もいないので， 家主は形ばかりに葬って四十九日も追善した。ある日長右衛門はふと思い出して錦の袋を出してみると一本の錆びた剱が入っている。すぐに地主の薮田へ研ぎにやると，薮田は一目見てびっくりし，これは間違いなく天国の剱だ、と鑑定した。長右衛門は大変に驚いて，薮田に頼んで江戸へ送ってもらうと，刀剣鑑定家の本阿弥から白銀を二十五枚送ってよこした。そうしてその刀は公儀に献上され江戸城の御蔵に納められたそうである。[32]

この噂話はこの後、文武天皇の大宝年間(701-704)の天国と言う刀鍛冶の名人の話に変わって長い歴史が述べられている。その持ち主だった老婆がどういう身の上の人なのか，その人の先祖は誰だったのか，彼女はどんな風に生きて来たのか、などを聞きたいのだが、それは全然聞かせてくれない。そういう歴史的に価値のある名刀を伝えて来た家柄なので老婆はもとは相当な身分だったとみえる。そうして貧しくなっても慾のない女性だった。しかし江戸時代の随筆家にとっては何の特徴もない貧しい老婆の身柄や伝記よりも歴史的にしっかり記録のある刀鍛冶の方に興味があったのだろう。随筆家の男性として当然であるが、人間観察の方が面白いと思う人間に取っては物足りない。

骨董珍品２： 笙の笛

伶人(雅楽を奏する官吏)の時元が語った話である。同じく伶人の武吉の所に賤しい女が舌のない笙の笛を持って来て売ろうとしたので、武吉がいくらかと訊ねると知らないという。

「あなたにとって笙の値打ちだと思えるだけ下さい」というので武吉は絹二疋を与えて笙を受け取り、つくづく見ると二つとない名品の笙だった。 武吉は驚いてもっと払うべきだと思って帰りかけている女を呼ぶと、彼女は武吉が笙を返すつもりなのだと思って命の限り逃げ出した。ようやくつかまえ

---

[31] 野乃舎随筆、p. 94-96。

[32] 笈埃随筆 p。278。

て連れて来ると、女は恨めしそうに「上流の方達は約束を変えたりしないものですのに」と言う。 武吉は「いや、返す為ではない，笙があんまりいいものだから、もっと払おうと思っただけだ」と言って、もう三疋の絹を与えると女は喜んで帰って行った。さてその笙に舌をつけて吹いてみると、比類のない名笙なので後には朝廷に捧げられ、いまでは洞院にあるということだ。[33]

女が品物を返されると思って逃げ出したと言う事から彼女が笙については無知だったとわかるのだが、ではどうしてそんな女が名品の笙を持っていたかが謎になる。盗品かもしれない。しかし楽人に取ってはそんなことはどうでもいいのである。ただ正当な報酬を与えたい。やはり芸術家はそうでなくてはならない。女の方では上流の人間は約束を違えない倫理的な人達だと信じている。これも面白い。現代の基準とはちがっていたのである。

偽男子−変性女／男子−半月（ふたなり）

麹町十三丁目の蕎麦屋に吉五郎といふ下男がいた。 実は彼は女子だったのだが長い間人々はそれを知らなかった。年格好は二十七八才くらいで月代(さかやき)を剃り、いつも腹掛をかたくしめていたので胸のふくらみは見えなかったのである。 吉五郎の背中には俗に金太郎小僧と呼ばれる青と紅がまじってすさまじい大きな絵の彫物がしてあったが、それは全身にわたって手足の甲まで隙間なく彫られていた。彼女は丸顔で大柄、ふとり肉でその働きぶりは男と少しも変わらなかった。

誰がいいだしたのか、彼は偽男子だという風評が聞こえて来た。そのうちに四谷の博打うちの男が吉五郎と通じて男子を生ませた。これで地域の評判がひどくやかましくなったので、蕎麦屋の主人は吉五郎を解雇して、生まれた男の子を引とって養育した。吉五郎は一旦木挽町のあたりに移ったのだが、天保三年(1832)の秋に町奉行所に召捕られて入牢した。彼女が十一月に取調べの為に牢屋敷から引出されて奉行所へ引き立てられた時は、小伝馬町のあたりは見物の群衆で垣ができたそうである。

噂によると、この女は他国で良人を殺害して江戸へ逃げて来て偽男子に化けたということだが、事実か虚説かはっきりしない。四谷の住人にも聞いてみたがその女が男子になった理由はわからなかった。

四谷には他にもその女に似た変装の人物がいる。四谷大番町の与力某の弟でおかつと呼ばれる。幼いときから変わった性格で女装が好みだったらしくすべて女の子の物を身につけていたが、成長してもそのまま扮装を変えなかった。髪も丸髷でつとを出して櫛笄をさしている。衣裳は女のように広い帯をしめているから、見た所誰も男だとは思わないが、気をつけて見れば歩き方がいかめしい。今年は四十いくつになっているだろう。 妻もあり子供も幾人かいて針医をしている。四谷では彼を「おんな男」と呼んで知らないものはいない。年来こんな異形の人物だが悪事を働くということはない。それに与力の弟だからだろうか、彼は全然罪をきせられる心配がない。あの偽男の吉五郎はこのおかつをうらやましく思って男の姿になったのだろうか。いまだに理由はわからないという。とまれかくまれ珍説で、後に話題になるかも知れないから備忘の為に簡単に書いておく。[34]

以上は滝沢馬琴の記録した変性男子の話だが、馬琴は変性男子に特別な興味を持っていたのか、京都祇園町の宇吉という変性男子のことも書いている。「

馬琴の友人で松坂にいる篠齊から十二月に来た手紙によると、 篠齊の知っている宇吉という男は女だそうである。元は軽業（かるわざ）にいた女だったのだが、いつの間にか男の姿になっていた。もちろん頭も元服しているし、衣服から立振舞まですべて男と全く同じである。但し彼は悪事を働く者ではない。曲芸の時から皆は知っていたけれども人々は宇吉を「おとこおんな」として受け入れていたようである。

おかしい事に宇吉が其辺の娼妓などと情を通じていわゆる密夫(まぶ)になったのは一度や二度ではないそうだ。今のところ、宇吉はある曲芸の仕事から引退した美女と夫婦のように一つ家に住んでい

---

33 北窓瑣談　p. 254−255。

34 兎園小説余録 P. 34−35。

るそうである。 篠齊氏は、「もっとくわしく申し上げたいのですが、筆では書きにくいこともありますので、それらは省きます。この女たちの同寝中のささやきごとなどはひそかに聞いてみると実物の男女のようだそうで不思議な事です。世の中には様々な変わり者がいるもので、宇宙は全く広いと思わざるを得ません。 琴魚などはこの宇吉をよく知っているそうです。軽業師の中には姉妹分などと呼んで、女同士が男女の間より親しい関係になる習慣もあるそうで、宇吉はその先輩のような人物だといえます。先に御知らせくださった吉五郎は、今一段奇怪な女性だと存じます」云々と篠齊は書いている。

馬琴はさらに書いている。「この手紙によって思うことは、例の宇吉は半月(ふたなり)なのだろう。半月は上半月の間男体で、下半月間は女体である例もある。又陰門と男根とを相具する者もいる。その男根は陰門に隠れていて、事を行ふとき勃起する事は禽獣と変わらないという説がある。私の旧宅近辺の商人の独り息子に半月がいた。その子が幼ない頃、母親といっしょに銭湯に来ているのを私の妻などは時々見たという。陰門の中に男根があって廷孔のそばに亀頭が少しばかり垂れている。なすびといふもののようである。母親は人に見られる事をたいへん辛く思って、座っていなさい、座っていなさい、と言ったけれども、子供の事だから恥らいもしないでつっ立っていたということである。七八歳までは女の子のように扱っていたが、十歳以上になってから、名前も男名に改めて男装に変えたのである。小柄で柔和な人で近ごろは父親が亡くなったので親の活業を継いでいる。 半月は子供ができないというが、たしかにそうであるらしい。」[35]

他にも変性男子／女子、半月(ふたなり)の話はいろいろあって、これは都会の話ではなくて田舎のことだが尾張愛知郡米津村の百姓の娘の話が他の随筆集にも出ている。[36]『豊芥子日記』 の中ではそねという娘で父親の名は五左衛門、『甲子夜話』ではそのという名で百姓喜右衛門の娘であるが、明らかに噂の源は同じで描写も似ている。当年二十七才のそのは今年四月上旬頃から陰門が強く痛み、熱が出て寒気がしたけれども、持病に癪があるし、女のことだから誰にも言わずに押し隠していた。すると五月上旬になって陰門の中から男根が生じてだんだんすっかり本物の男になってしまった。声も男に変わり痛みはとまった。『豊芥子日記』 の方のそねの話も全くおなじである。本当の男になってしまったのでそねは仕方なく両親へも話し、頭も月代を剃りたいと言った所、両親は始めは反対だったが後に仕方なく月代をそらせた。これは変性男子の症状なのでお代官所に届け，役所から検分に来て確かめてから許可が出てそねは元服して久七と名を改めそれも届けた。

同じ人物らしい『甲子夜話』のそのは二十二歳だということだが、変身の経過は大体そねと同じで、男になってからの名前は久七郎と変えたとある。土地の代官水野権平がこのことを聞いて，役人を遣わして見届けさせると、容顔筋骨髪乳などすべて男の身体なので、水野権平から飛脚で市谷の尾州家の御館へ早々注進させた。その書状の写しというものが世に出て、此ごろは何処へ行ってもその噂話ばかりであると書いてある。

もう二つ同じような話があるが、この方は二人とも仏教の学生で三年の勉強の後故郷に帰るために旅立ってある村まで来た。おりから霖雨がさかんに降って道が見えなくなったのでその村のある家にしばらく逗留した。するとある夜の夢に、自分が女に変身してしまった夢をみたと思うと目がさめた。すると果して陰茎が縮まって陰門になっていた。こうして声も外見も女になったのは十八歳の時であった。目鼻立ちがすぐれて非常に魅力があったので、泊っていた家の主人が関係を持って彼を妻として子供を産んだという同じ話である。[37]

二十世紀二十一世紀には人工的な性変換は珍しくない。自然に変わったという話はあまり聞かないが医学の援助を受けて性の変更を確実にするということはもう少しも珍しくないことになっている。精神的に、性格的にどうしても女性になりたい、男性になりたいという人は案外多い。元の性のまま、服装もそのままでとどまる人が多いのは普通だが、どうしても手術で性変更を願う人と，手術なしで服装だけ変えて満足している人も多い。多種多彩でおもしろい世の中だと思う。

---

[35] 兎園小説余録、P。71-72。

[36] 豊芥子日記、上巻：317。甲子夜話、6：144-145。

[37] 齊諧俗談、p．321-322。閑田耕筆、P．218。

そういう傾向を精神医学者の所へ行って無理に変えようとすることに私は疑問を持つ。後天性のものならば障害なく自然欲望を変えることができるのかもしれないが、先天性の変身願望が精神医学の先生の所へ何年も通って高価な医療費をいくら払っても無効なだけでなく、本人は精神異常になって苦しんだり、悪いケースでは犯罪などに変わってしまうことがあるものだ。

とにかく江戸時代に先天性の変身願望の例が見られたのはおもしろいことだと思う。こう言う話は所や時代を選ばない。ちょうどこの随筆を読んでいた頃、新聞で関係のある記事を見つけた。新聞記事は男女性別について、先駆的な仕事をされた九州国際大学教授の大島俊之氏と、２０００年に神戸であった「アジア性科学学会」で大島氏の講演を聴いて同志になったもと助産師、のち参議院議員、法務大臣になった南野知恵子氏である。この人たちは男女の性別の曖昧さ不確定によって身体的にも法的にも苦しんでいる人たちのために、その問題を理解し、取り扱い、法的性別変更を可能にする努力をして「性同一性障害者特例法」の成立をもたらした人たちである。外国語をまっすぐに翻訳したような言葉だが、それは欧米ではこの問題が早くから取り扱われ、もっと理解を持って対処されていたのに、日本にはこの問題に対応する言葉さえなかったのだと思われる。この問題はゲイの問題にもつながり、さらに中絶堕胎産児制限にもつながる。

江戸時代には戸籍上の性別が変えられないという理由から法的問題になるということはなかったから，人に噂をたてられるとか疎外されるというくらいの害ですんだかもしれない。女になった吉五郎は召捕られて入牢したというが、これは他に罪を犯したのだろう。性変換をしたこと自体が罪になった例は外にはないようである。近代の方が男女の性の不確定による問題は複雑性を増したようである。しかし大島氏南野氏のような先進的な考え方、人道主義的なものの見方をする人たちのおかげで、世の中が難しい問題の解決にすこしずつでも人間性をくわえて来ているのはよろこばしい。

しかし、今まで私はこの問題について欧米はもっと進歩的な考えを持っていると信じていたのだが，　つい最近その問題を鼻先につきつけるような演劇を見て自分の認識不足を知った。それはインド系アメリカ人で、女性から性変更の手術によって男性になった劇作家/俳優の作品である。彼はある劇場の企画した前衛的な演劇祭で、全く自伝的な劇を独演で行った。舞台に出て来た所を見ると無精髭をはやした全く普通の男性で，始めは自分の事を劇化しているのだとはわからなかった。彼は自分の性的問題について、多数の自分の廻りにいる家族や友人が取って来た態度をそれらの人々の声や身振りによって語った。ごく若い時から四十歳になるまで彼の人生は問題続き，排斥、反対，弾糾続きだった。中でも一番過激だったのは彼(女)の母親で，古いインドの家庭で育った人だから性変更の手術など思いもよらず，自分の娘がレスビアンである事さえ受け入れる事の出来ない女性であった。そうして彼女が女の名前からデイーンという男名前に変えたときも，その名を絶対に口にしなかった。デイーンが「彼女」という代名詞から「彼」に変えてくれと頼んだときも他の人達はみんなその望みに従ったのだが，母親は絶対に「彼」という言葉は使わず，第一彼を自分の家に入れる事もしなかった。

父親の方は外見的には楽観的で話題をなるべく避けて陽気な面白い話ばかりをするという解決法を取った。彼の恋人である女性は，始め二人ともレスビアンでうまく行っていたのに、名前がデイーンになり，ホルモンでデイーンに髯が生えて来ると非常に抵抗を感じるようになった。他の様々な人々の，過激な排撃を含むプロ、コンの態度の中で，一番複雑で繊細な問題があったのはこの恋人の態度である。彼女はもともと男性嫌いなのだから，男性に変わってしまった恋人をそのまま受け入れろ、というのは無理な要求なのであった。といっても別れるには二人の関係は余りにもすすみすぎ，歴史があった。

そういう複雑な問題を専門家ではない私が検討しても始まらない。私が言いたいのはその劇の最後に舞台の後のスクリーンに映された何百という名前の歴史である。全部この劇作家の知っているケースなのだが，何百人というその人々は性変更手術を受けて異性に変身した後、自殺に終わったり，他人の憎悪の対象となって殺されたりした犠牲者である。私はその数にすっかり驚いてしまった。それまでアメリカ人の変性者に対する態度はもっとリベラルで同情的だとばかり思っていたからである。とんでもない秘密を打ち明けられたように私はすっかり憂鬱になってしまった。この劇は『Draw the Circle』と言う題で、Deen という名だけで知られている劇作家俳優である。

オバマ大統領は最近同性結婚をみとめたが、政治上法律上、性同一性障害者の問題は更に難しく，陸海空軍の扱いは未だに解決がついていない。

はねつけ

昔から「上げ膳食わぬは男の恥」とか言って、男性は女性から誘いを受けると男のメンツにかけて受け入れたようである。世の中には男を追っかける女も多いのだろうが、江戸の見聞集の中には男が女にはねつけられる話の方が多い。その方が珍しいからだろう。例を少しあげる。

はねつけられる男１：堀川の妾女

京都の堀川の辺に，昔貴人の邸に宮仕えをしていた女が，今は或る人の妾になって住んでいる。同じあたりに髪結いを業とするいやしい男がいた。この男は 容貌がよく、雛人形のようだ、今業平だ、と人に騒がれていた。それで自分ほどの美男は外にはいないと思い上がってその近辺の女を思いのままに手に入れてたのしんでいた。

ある時この髪結い男が、堀川の妾女を思いそめて，通り道で会ったとき、何かと自分の思いをほのめかすと、彼女はただにっこり笑っているので、すぐに人を雇って自分の胸の内を伝えてもらうと悪くない反応があった。こんどは手紙を書いて送ろうと思ったがこの男は残念ながら無筆なので人に頼んで書いてもらった。その手紙を送った次の日、代筆人が返事の手紙を持って来たので喜んで開いてみると、奇麗な紙に美しい筆跡で書いてあるのはさすがだった。が自分では読めないので仲立ちに読んでもらうと，

「人並みでもない私のことをこうまで思ってくださることは後の世までも忘れないでしょう。けれども今は自分の思い通りにならないことばかりですので、すこし心にゆとりを持って私の思い通りになる迄お待ち下さい」などと嬉しいことがなまめかしく書き付けてある。この男は他の人も見ているので、すっかり得意になって鼻たかだかと聞いていた。すると手紙の終りに歌があった。

身はおもうままになるとも髪あげをかみの毛ほどもおもうものかは

というのだった。無筆の男でもその歌の意味ははっきりわかった。これですっかり二人の地位があきらかになったので、この男はやみくも悔しがり足摺をして泣いたけれども，女は畢竟ある人の思いものなのだから仕方なくて、ただ大恥をかいてあきらめたということである。[38]

いつの世でもうぬぼれ男は嫌われ、そんな男は恥をかかされても気がつかないことが多いのだが、歌の意味があまりにもあからさまなので、この男も気がつかざるを得なかった。女の方ではもちろん始めからはねつけるつもりだったのだろうが、道ではにっこり笑い、手紙も文章の部分は軽蔑した風は見えない。最後に小気味よくけり倒したのは考えようによってはずいぶん残酷なやり方である。しかし妾でも一応教養のある女性らしくて美しい紙に書かれた手紙は筆跡も際立っている。自分の身を卑下したような書きぶりで始まっているのは常例のしきたりである。歌はむきつけの言葉が使ってあって上手ではないけれど、一応歌を詠むことの出来る人である。そう言う女性がいくら美男でも読み書きもできない髪結いの男を頭から馬鹿にしていたのはやはり身分制度社会であった。自惚れ男を蹴って今までもてあそばれた女たちの仕返しをしたのだと思いたい。

はねつけられる男２：親切のお返し

もうひとつは歌人らしい男の話である。長門の阿武の素喜という人が、どこかからの帰り道で小川の前で二人の女性がひどく困って立ちすくんでいるのに出会った。わけを聞くと河の水が増して、ことに丸木橋なので恐ろしくて渡りかねているという答えだった。 素喜は「心配なさるな，私が負って渡してあげましょう。肩に手を置いてください」と言ってひとりずつ負って渡し終わった。女たちはたいへん喜んで感謝した。素喜はやがて、

たおや女があやぶむ谷のながれをもはやせにおいてわたりつるかな

と口ずさんだ。すると一人の女が、

谷川のふかきながれもわたりけりあさくはあらぬ君がなさけに

---

[38] 猿著聞集、 p. 441-442。

と色よい返しを詠んだ。 素喜は喜んでしまって，「私にまごころがあったから負ってお渡ししたのです。真剣になってください」などとほのめかすと，女はただ微笑んでいた。なおも言い寄りながら進んでいくと悪くない調子で乗って来た。

さて町に出て、人通りが相当増えて来ると，女は改まった様子で「私たち二人は姉妹です。はしたなくいい加減なことを言わないでください」と声もするどく言い放って威容をつけて歩いて行ってしまった。 素喜はがっかりして足早く逃げ去った。隠徳をほどこしてかえって恥をかいたことである。[39]

これは素喜という人物を中心に書いてあるが一体どういう趣旨の話なのだろう。素喜は僧侶なのだろうか、ただの文人なのだろうか。折角親切心から女たちを助けてやったのに妙な野心を出したばかりに見事に鼻をへし折られた事を語って浮き心をいましめているのだろうか。それとも女たちを恩知らずだと非難しているのだろうか。歌がすぐ出て来る所は男女とも教養のある人たちで、素喜は相当に修行した歌人なのかもしれない。それならばみやびな歌の応答だけでやめておけばよかったのだが、女の歌が「あさくはあらぬ君が情けに」などと、思わせぶりなので、素喜が妙な好色心を出してしまった。女の歌に乗ったばかりに恥をかかされた。そんな場合どちらが悪いのだろうか。

隠徳をほどこしてかえって恥をかいたというのだから、女たちに対する批判の気持ちもあるらしい。しかし女が良家の女性たちならばはねつけるのが当然である。ただ、始めに世話になったし、素喜が少し言い寄り始めた時にはねつけては、山の中に置いてけぼりにされるかも知れないという懸念があっていい加減に相手をしていたのだろうか。女の方にはそこにずるい目算がある。

一方本当に女に言い寄る意図はなくても機会があれば何かほのめかさずにはいられない男がいるものだ。 素喜もそういう人だったのかも知れない。これは素喜が実際に起った事を文人仲間に笑いながら話したのだろう。彼はきっと「女というものはわからないなあ」と言ったことだろう。

淫蕩な後家

江戸時代の男たちは「夫を失った女というものは、年齢に関わらず淫乱なものである」という固定観念を持っていたらしい。それは何人かの未亡人と関係を持った徳川家康の影響が少しはあるかも知れないが、何かにつけて後家とは性に熟達した女，性に飢えている女、という見方をした様子が見える。結果としてそんな女の噂は多い。

淫蕩な後家　　1 ：福田屋の後家

浅草諏訪町に、代々富裕な福田屋七兵衛という商家があった。先代は若くして亡くなり、弟が家を継いで今の七兵衛になっていた。先代七兵衛の後家はまだ二十三歳の美女で、歌、俳諧，琴、三味線、茶湯、手跡、何でも出来る伊達もので,好色を第一とした。一人になると自分の思うままに堺町に出かけて役者やほかの若い男を買いあさり金を使いまくったので、番頭をはじめ親類一同は心配して家族会議を開いた。相談の結果後家を観音池のあたりに隠居させ、必要な道具は全部揃えて送ることにした。彼女は一人になったのをよい事にしてますます数多の役者を呼んで遊びさわぎ、小坊主を召連れて堺町辺の女湯へ行ったりした。後に、彼女は役者大谷広次の家に住んでいると聞いて、手代がその家へ行くと、役者は留守をつかって会おうとしない。その翌日朝又行くと広次は「とにかく私が呼んだのではありません。けれどもあなたが連れにこられても絶対に帰らない、と言っています。無理を押すと傷害沙汰になるかもしれません」と答えた。そこで手代も立腹してお公儀の町役人に願い出た。奉行所で取り調べると大谷広次は先に説明した通りの事を申し上げたので、後家は今後、今の七兵衛の跡継ぎとも福田屋とも全然関係を切るということでやっと解決がついた。[40]

いつの世でもどこの國でも色情症(nymphomania)の女性は国民人口の何%かはいたのだろう。けれどもこの女性はまだ二十三歳という若さだから、エネルギーを抑制しかねて遊び歩いていたのかも知れない。今の世の中ならば少しも珍しくないことだろう。西でも東でもエネルギーを持て余して羽目を

---

[39] 猿著聞集、p. 438-439。

[40] 江戸真砂六十帖広本、 p. 84-85。

はずす若い女性は大勢いる。しかし社会の女性が全体的に抑圧されてお行儀よく家に納まっていた頃、おおっぴらに好色を第一とする事を標榜したという女性は珍しい。しかも彼女は芸事は何でもできたというのだから。そんな女性ならば和歌俳諧，茶の湯や音楽の方にエネルギーを注げば名人になれ、顰蹙を招かずにすんだのに。生来異常に淫乱というのではなく、ただ若さのあまり遊び歩く女性は年を取れば自然に落ち着くのではないかと私は思っている。

淫蕩な後家　　２：息子の諫言

江戸小網町に、ある人の未亡人で年は三十七八ばかりの女性が、朝な夕なに白粉を塗り紅を付け衣裳も今様の風流をつくし、あるいは芝居見物、あるいは神社詣で、寺参り等と、毎日出歩いていた。相当の年月の間そうしていたので世の中のそしりや人のあざけりで家族や親類は耳が痛いことだった。その女性には二十歳ばかりの男の子がいたが、彼は非常に母のことを恥ずかしく思って苦しんでいた。しかし親の事だからなかなか言い出せなくて、人に頼んで諫めてもらったのだが、母は少しも耳を貸そうとしなかった。もう他に手段はないと思ったのか、息子は書置を残して両国橋の上から身を投げた。するとなぜか彼の体は沈まないで川上に流れされて行き、駒形堂の辺で人々に引揚げられて親元へ送り返された。母親は自分のあやまちからこんなことになったのだとついに深く反省して、ふっつり世俗のことに興味を失い、髪を切って様子を替え,後世の救済を祈る人になったということである。[41]

著者はこの女性の変身は神仏のおかげとは書いていないし親孝行の賜物だとも書いてない。 勧善懲悪的説教がついていないのは非常にいい。しかし後世の救済を祈る人になったというのはごく普通の勧善的説教である。

それよりも、どうして息子は川下へ流されなかったのか、泳ぎの達人ではなかったらしいのにどうして溺れ死ななかったのか、それが不思議だが説明がない。川上に流されたというのは上げ潮の時だったのだろうか．泳げなくても自然に上手に体を浮かせる事の出来る人はいるものだ。とにかく書置を残して飛び込んだという荒療治は母親に効果があったのだろう。手紙も真心をこめて書いたのだろう。この前の話と同じような淫蕩な傾向を持っていた女性がすっかり改心したのだから珍しい。 毎日いきいきと生活をたのしんで精一杯に生きて来た人間が急に念仏三昧の生活に入るというのは必ずしも精神衛生的にはよい事ではないと思うのだが―この著者はやはり一応親孝行を讃えているのだろう。

淫蕩な後家　　３：路考比丘尼

橘町の医者印牧(かねまき)玄順の女房は夫を失ってすぐ髪を切ってしまった。人々は同情して、早まるなと忠告したりしたが、この女がとんでもない化物だった。芝居好きで狂言が変わればすぐに頭のてっぺんから足の先まで芝居風な派手な装いをして見に行く。実は此の女は人知れず前々から不義をしていたのである。夫が死んだあと、夫の家族が世話をして川崎あたりの富豪に再婚させようとしたとき、女は秘密の恋人に逢えなくなる事に我慢ができなかった。そして考えたあげく、芝居の『仮名手本忠臣蔵』の中で天川義平の妻を親が再婚させようとしたとき、大星由良之助の名案で髪を切って再婚をさけた、という話を思い出して、さっさと髪を切ってしまった。人々は殊勝な事だと思っていたのだがこれはとんでもない詐欺だった。

好色のこの女は去年の盆に狂言の女鳴神で瀬川菊之丞を見てから「路考比丘尼」と呼ばれたくて大浮気をおこして美しくおしゃれをし、贅沢な黒づくめの着物に黒ちりめんのかぶりものを深々とかぶって、器量よしの召使い二人に、白地に草づくしのすそ模様の着物を着せた。その着物の肩に、一人は白雲、一人は黒雲、という字が染めぬいてあった。これはもちろん鳴神上人の二人の弟子の名前である。そういう目立ついでたちで、毎日浅草焔魔堂、榧寺、文箱地蔵など、辻談義説法の人の集まる所へ出て、

---

[41] 新著聞集、 p.268-269。

浮気男を白昼誘惑して遊んだ。表面は一旦仏道に入った振りをしているが、好色無二の大化物とはこんな女を言うのだろう。[42]

江戸の講釈師で実録などを書いていた馬場文耕は江戸の風変わりな人物を描写して『江都百化物』と題付けたのだが、この芝居気違いとでも呼べる女性も化物の一人に数えている。世間の常識や親類家族の希望に逆らって、一方では偽善的に出家の真似をし、他方では反乱的な自由行動を取っていた女性である。彼女は女性的自覚があったのでもなく，女性全体の自由を願ったのでもなく、先にも言ったように、エネルギーをもてあまし、ただ淫蕩でしかも虚栄心が強く自己顕示が大好きだっただけである。こういうタイプの女は江戸時代にも相当いてあちこちで竜巻を巻き起こしたらしい。それを化物と呼ぶのは少し気の毒な感じがする。白子屋お駒の母親のお常もそういうタイプだったし、他にも噂話の中にそういう女性が何人かいる。

今日ではそういう人がいてもちっとも噂話にはならないし、かえって他の男女から面白い女性だと思われて支持を受けたりしている。それだけ日本の女性が自由になったという事なのだが、教育は昔よりずっと進んで居るのだから、ただ元気がよいというのではなくて、賢明であってほしい。この女性は賢明ではなかったから化物呼ばわりをされても仕方がなかったかもしれない。

母親探し

昔奈良に磯貝をいう墨師がいた。著者の柳里恭の父の時代は、 磯貝の家は栄えて他国へ墨を売りに行く雇い人も職人も多かった。しかし彼が他人の妻と密通したことが明らかになってその地にいられなくなり、 磯貝は相手の女と一緒に逃げて近江の大津で書道の先生になって世を渡っていた。五年程あと、その女が奈良に捨てて来た娘の実父が亡くなったので、娘は母が大津にいると聞いて探しに出た。しかし奈良からつきそって来た者は悪い男で、娘をそそのかして京都を無駄にさまよい歩かせ、その間に持って来た衣類や金を全部奪ってしまった。娘は乞食になって一人でやっと大津にたどり着いた。

雪が降りしきるある夜、磯貝の家では外の軒端で誰かが苦しんでいる声が聞こえたので、 磯貝が扉をひらいてのぞいて見ると、一人の少女乞食が菰をまとってうずくまっていた。不憫に思って妻にそのことをいい、妻も故郷に置いて来た娘のことを思いながら少女を内に入れて介抱し、土間に筵を敷いて寝させた。翌日送り出す時に身の上を訊くと「私は奈良の角振というところの者ですが、母は身持がよくなくて人と関係して家を出ました。今は父も亡くなり、家をつぐべき者も家を捨てて国を出てしまいましたので、しかたなく、私は母が大津にいると聞いて訊ねて来たのですがまだ会えません。乞食になったのは京都で悪い人にだまされて何もかも取られてしまったからです」と答えた。磯貝夫婦がよくよく見るとたしかに妻の子であったけれどそれを言い出すこともしなかった。

郡という所に乳母の親類がいるので、その娘に手紙を持たせてそこへ送り、しばらく世話をしてもらい、後になって他家へ嫁入らせたということである。人の因果は過去の業といっても、善悪の応報は三代も待たない。この世の報いはこのように早く来るものである。[43]

人間同士の関係というものは際限なくつづいていて、誰かがしたことは必ずどこかに影響して出て来るものである。この娘は何とあわれな事だろう。今の社会では親が子供を養子に出したり捨てたり自分で育てることを拒否した場合,それらの事情が子供に与える心理的な傷害を非常に重視している。その子供が実の親から拒否された痛みがその子供の性格形成に悪い影響を与える例は多大で恐るべきである。江戸時代には心理学などなかったからそれを云々することはなかっただろうけれど、だからといって子供の心に傷痕が残らなかったわけではない。子供を捨てて出て行く親は現代ほど多くなかっただろうから、捨てられた子供はかえって人一倍疎外感を持ったかもしれない。

この娘は親には捨てられ、旅先では悪い男に持ち物も金も全部巻き上げられ、着いた先でもまた親に娘だとみとめてもらえない。この母親が娘に名乗らないのは自分の生活に都合が悪いからである。

---

[42] 当代江都百化物 p. 396-397。

[43] 雲萍雑志、P. 251。

磯貝も妻の娘だとわかっていながら言い出さなかったのは、同じ様な利己主義な理由からだろう。此の夫婦の心理は、今の時代子供を捨てる親たちの徹底的な利己主義とよく似ている。しかしこれは本来の日本的親（とくに母親）の心理状態ではない。

芝居が純正な日本的心理を代表するとはいえないが，とにかく歌舞伎で子供を表面上非人情な扱いをするときには正当な理由があって、いわゆる義理人情の板挟みになる人達の話に作られている。そのように納得できる理由が筋書きについていれば見物人は喜んで涙を流す。『傾城阿波鳴門』の巡礼お鶴の父母は主家の悪家老がお家を乗っ取ろうと企んで主家の宝刀を盗んだのでそれを取り返すために盗賊になっている。母親は娘に自分が母だとどれほど名乗りたくても、忠義という封建的には正当な重い理由があるので真実をうちあけられないのである。

『恋女房染分手綱』の国主の姫の乳母重の井は、馬子の三吉が姫の遊び友達になった後、重の井の名前を聞いて自分の母だと知り、涙ながらに一日でも父母と一緒に暮らしたい、とすがりつくのにその願いを聞いてやれない。主家には過去のいろいろな恩があり嫁に行く姫の生来も見守らなくてはならないという義務感からである。

又昭和の新歌舞伎『瞼の母』では博打打ちの忠太郎が母を探して放浪のあげく水熊という料理屋の女将として成功している母親を見つけるが，母のおはまは差し迫った娘お登世の結婚と将来の幸福を守る為に、やくざになった息子をつき放す。これらの女性はみな自然の衝動を殺して義理を立てるために辛い苦しい思いをするので、観客は同情の涙を多量に流すのである。芝居だとはいえこのような親子の愛情の衝動と義理の葛藤、それに対する同情の方が自然な日本人の感情ではないだろうか。 日本人であろうとなかろうと子供を捨てる方が不自然なのである。

よくいうことだがある種の人間は子供を持つべきでない。上記の挿話の夫婦は二人とも子供を持つ資格のなかった人たちである。

祭りの悲劇

子供を持つ資格がないと言えば、このような話もある。

隔年六月十五日の山王祭はいつも賑わしく、「国中の人が気が狂ったようになる」と言うのはこんな時を言うのだろう。今年、四五歳の女の子の事件が起こった。この場合、子供によせる父母の愛情の度が過ぎていて、幼い娘に美しい着物を何枚も重ねて着せ、あらゆる装飾花飾できらびやかに飾りたてた輿に載せ、錦繍をほどこした華やかな布団を何枚も重ねて、人形然とした娘を布団の中に坐らせ、一日中町中を行き来させた。父母は大得意で可愛らしい娘をみせびらかすのを誇りに思って「人々はさぞ褒めてくれるだろう」と言い交わした。祭りの三四日、毎日同じように車を出させていた。最終日の前日に、途中で食事を与えようと立ち寄ってみると、娘はいつの間にか息絶えていた。炎暑の頃の事で、厚着をさせて一日中日射にさらしていれば幼い子供が蒸されて死ぬのは当然だった。その父母の愚かさは言語を絶する。すべて祭りというものはいろんな思いがけない事が起って横死する者が往々出るのである。氏神の祭りに氏子が非業の死を遂げる事は当時の人々の考えでは神慮にどう影響したのだろうか。地域の長たるものはよくよく愚者たちに反省を促して異変が起るのを防ぐべきだった。もっとも嘆かわしい事は資力のない者が祭礼のための衣服を用意するために妻娘を遊女に売ったりする事がしばしばあったと言う事である。こういう風俗を見捨てていたのは町役人や幕府の罪というべきである。[44]

親子再会譚

江戸の見聞集には親子の再会というトピックも多い。始めの話には吉原の遊女が出て来るが、その遊女の名は細見には見られないので普通の町の女性として扱った。

親子再会譚　　１：　扇の縁

---

44 甲子夜話１、p。195−196。

ある大名の抱え医師田中某は療治の暇に俳諧を楽しんでいる。 五月雨の頃病用で吉原へ行くことがあった。診療がすんだ時自分の麻布の家へ帰るには遠過ぎ、翌日は浅草の病家へ行かなければならなかった。偶然俳友に出会って誘われたので、遊興の心はなかったけれども吉原の扇屋に一晩泊まることにした。

酒興に篁(たかむら)という新造を揚げると，彼女は田中の持っていた扇に眼を付けた。

朝涼しかけ物かけてかしこまり　　如蘭　　と書いてあるのを見て、

「この発句はどなたのですか。お親しい方のですか」と篁は聞いた。
「私の俳諧の友だちで心安い人のだ」と答えると、
「江戸の方ですか，上方の方ですか」とさらに聞く。
「大阪の人だよ。なぜ訊くのだ」と田中がただすと彼女は苦笑して外のことにまぎらせ、座を立ったが，まもなく禿をよこして彼を他の座敷に招いた。

「その句を作った大阪人はお心安いとのこと，年ごろやお名前は」と聞いた。

「それは木屋栄治という人だ」と答えると篁ははらはらと涙をながしてうつむいた。「長いお話があるのですが、今日は客もあり委しくは申し上げられません。今晩は他の新造をお揚げになって下さい。重ねてお揚げになる必要はありません。そして二三日のうちに私を揚げにお越し下さい。すこしも御迷惑はおかけしません、ぜひぜひお願いいたします」と篁は涙にむせび，真心を顔に表してたのむので，田中も動かされてその通り約束した。

約束の日に扇屋へ行って篁をあげ、一通りの座敷作法がすんだ後、たかむらは禿を退けた。

「お恥ずかしい話ですが，私はその木屋栄治の娘の袖という者のなれの果てでございます。八年前、江戸店の手代が商用で上って来て、半年ほど父の家で働いておりましたとき，若気のいたりで関係を持ちました。手代は江戸へ帰りましたが私は忘れられず，お金を百両持ってかけおちしました。江戸のここかしこで半年程浮かれ歩き、その後半年も一緒に暮らしましたが、もともとその男は心のよくない不身持ちな男で、金がなくなると辛くあたって、私はこのような所に身を沈めました。つらい勤めを罰とくやんでも甲斐なし。幸い私は幼い頃から父の傍で俳諧，生花,碁、将棋、琴、すべて習い覚えましたので，日夜替わる客ながら、それほど心無い客も来ず、おかげで何とか勤めることができております。これも親の恩でございます。両親はさぞ憎いとも悲しいとも思っているでしょう。せめて一度でも便りを聞きたいと朝夕神仏に祈ったかいがあって、このたび思いもよらず、扇の発句から父上が息災なことを承り、あなた様を神とも仏とも思っております。今は対面も許されないでしょうが、せめてお情けに母への手紙をお届けくだされば御恩は一生わすれません」とさめざめと泣いた。

親は豊かなくらしの人たちだから、娘のこんな生活は外聞に悪いだろう。娘が決して他人にはお漏らしになりませんように、と頼むのでよいように取り計らうことを約束して翌朝別れた。

父の木屋栄治という人は大阪でもよほどの商人で、伊丹にも酒造の株を持っており、江戸にも手代持ちの店が五六カ所あるそうである。六年前隠居したので、毎年二百両あまり持って江戸に出て月花遊興に専念し、俳諧をたのしんでいるのだが、その関係で田中医師と出会って心安くなった。 それで木屋が今年江戸に下って来たとき、田中はその旅宿をたずねて人払いをし、ひそかに言出した。「貴方は養子に家をゆずって隠居しているとのお話でしたが、女の子を一人お持ちでしょう。」すると木屋はただちに否定した。

「けれども八年前に十九才の袖という息女が家出されたでしょう」と田中が指摘すると、木屋は肝をつぶした。「どうしてそれをご存知で。」

「さて、そのお嬢さんの居所が分かったらどう取り計らわれますか」と聞くと、木屋は涙を流して、「この上は何を隠しましょう。たった一人の娘ですから婿をとって家をゆずり渡そうと楽しみにして可愛がっていました。ところが縁遠く、月日を送るうちに大阪逗留をしていた江戸店の手代と通じたのでしょう。手代が帰って間もなく袖が家出をしたので、母親は狂気のようになって、いろいろ手をわけて尋ね、占いや祈祷などでも手を尽くしました。しかし神隠しとでも言うのか、行方が知れません。奉行所にも訴えましたが何の手がかりもなし。金子を百両持ち出したので男と連れ立って逃げたのだろうと思いました。江戸店からその手代は帰って来ないという通知もありましたが、調べようがありませ

ん。外聞をいとって、神隠しということにし、家出の日を忌日と決め、外に子供がいないから養子と嫁をむかえて家督を譲りました。私は別宅、妻は娘のことばかりなげき暮らして、神仏参りの外楽しみもありません。私は年々江戸へ下って月花の眺めに心をまぎらせるだけです。もし娘がまだこの世にいるとすれば母親は生き返ることはたしかです。一体どこでどんな風に生きているのでしょうか」と涙ながらにたずねた。

「ではお怒りなく対面なさるのですね」と念を押し、あったことをそのまま語った。

木屋は「まったく浅ましい身になったものです。どうぞこの上もあなたの御親切で身請けのことをお世話くださることを心からお願いします。外聞がありますから娘を国元へ返すことは出来ません。江戸で解決したとしても親子一緒になるのは面伏せですから、江戸店の中のふさわしい手代に嫁入らせようと思います。母親も呼んで対面させたく思います。」と切実に願うので、田中は扇屋へ相談に行くと、 篁は年季も来年は満たされるとのことなので、あれこれ談合して、百両で請け出して篁を木屋にかえした。その相談や、あちこちの交渉でしばらく篁に会いに行かなかったとき、田中は篁の手紙を受け取った。

「なきやみし虫をあんじて待つ夜かな　たかむら」**とあった。**

この話は「いたずらにうちとけはせぬ氷室守」という句に白扇楼、篁、と書いてある扇を田中が持っていたので「うつくしい扇だね」と言うと、田中がこれはこれこれの事情のある女だと語ってくれたものを書き付けたのだ、とある人が語った。[45]

私も一応細見を調べたが篁は見つからなかった。編者の鈴木棠三によると、吉原の扇屋は江戸町一丁目宇右衛門が本家、二丁目扇屋与三郎、同藤右衛門、角町に扇屋徳兵衛、京町一丁目に扇屋八郎兵衛がある。三村竹清翁の調べによると、安永から文化年間(1771-1817)にかけて、篁という遊女はそのいずれにも見当たらないとのこと。話が出来すぎているから、一種の講談的説話か、と鈴木氏は言っている。 篁という新造が文化以後に扇屋に現れたかもしれないがそれ以前の細見の調査は三村竹清と鈴木氏を信用できると思う。

私も一応寛政の始めから享和三年秋までの細見を全部調べて見た。扇屋だけでなく吉原全体の家と、新造だけでなく他の位の遊女も見たのだがそれらしい女性はいない。第一、 篁という品のいい名前の人はいないのである。一人だけ、高むらという名前の新造が寛政八年の春に京町二丁目の小さい店、加賀屋弥四郎の店に出た。寛政十年の正月になると彼女は部屋持（新造のすぐ上の位、小さい部屋を与えられる）に昇格した。その家は小さい店で町筋の一番お終いの河岸に近い方にあったが、面白いことにだんだん商売が繁盛したのだろう、店も同じ町筋の、反対側の、もっと仲之町に近い方に移り、遊女の数もだんだん増えて来た。享和二年春には高村は座敷持の上から二番目に昇格した。この店は座敷持が九人いて、その一番上の位だからたいしたものである。部屋持も享和三年には七人になった。しかし『耳袋』の話の女性は新造で、医者の田中に会ってから新造のままで落籍されたのだからこの女性ではないと思う。そうして田中は多分こんな小さい格の低い店には行かなかっただろう。とにかく、 篁というような立派な名前の女性は細見には出ていない。田村というのはわりに何人もあちこちにいるし、高はた、多群、高まき、高機、高うた、高潮、高篠、高はな、というような名前の新造や部屋持は何人かいるのだが、どれも村田屋、松村屋、中万字屋、俵屋、赤蔦屋、松本屋、稲本屋というような店で田中氏が行くような店ではなかった。

実話ならば名前は変名かもしれないし、別に篁でなくてもいいと思う。内容はよくある親子再会譚だが部分的には事実かもしれない。話の運びも筋書きも小説的で類型的であるがほんとうの話ならば多分幕末の事だろう。

幕末になって女性の職業の数が増え，昔のように遊郭や岡場所に身を落とさなくてもよくなった時代になってさえ女性が働くといえば賣笑だったようである。この女性のように教養があれば色んな芸事を教えて身と立てて行けたと思うのだが，やはりまとまった金を早急に手にいれたい人間---特に自分は働かないで遊ぶ金がほしいという了見の男には恋人を売りに出すのが一番手っ取り早かったのだろう。江戸時代は初期でも後期でもそれが常習だったのだ。

---

[45] 耳袋、２:298-301。

袖の親はこの期にいたっても「外聞がありますから娘を国元へ返すことは出来ません。江戸で解決したとしても親子一緒になるのは面伏せですから、江戸店の中のふさわしい手代に嫁入らせようと思います」などと表面をつくろう人なのが意外に感じられる。娘が遊女に身を落としたことなど、再会の喜びに比べたら何ほどのことだろう。其の後この女性の運命はどのように発展したかわからないが幸福になって欲しかった。

この次の話も類型的な再会譚で事情はよく似ている。

親子再会譚　　２：　山吹の茶

元文五年(1740)頃，ある神宮寺の長官をしている僧が上方へ行った時、 宇治で山吹という好みの茶を買って、宿に帰って来て飲みたくなったので湯を注文して茶を紙の上に置いて待っていると，宿の飯盛女が出て来た。茶を見て、「これは山吹の茶です。お好きなのだと存じますから私がおいれしましょう」と言った。僧はこんないやしい仕事をしている女が山吹という高級茶を見てその入れ方を知っているのに驚いていると、「私は小さい時から茶はよく煎じていました」と言って入れて差し出した茶は非常にすぐれた風味だった。身の上を尋ねると始は涙を流してあかさなかったが、重ねて尋ねると話してくれた。

彼女は宇治で一二を争う茶師の娘だったが、男に誘われてふと親元を出奔した。その男が亡くなってしまった後、悪い人の手に渡って身を落とした。「今はこういう暮らしをしております」と飯盛女は恥じた。僧は哀れに思い、「私は今から江戸へ帰るのだが，遠からずまた上方にのぼるから、その時のため手紙を書いておきなさい。あなたの親御さんの所へ届けて、その後のこともいいように計らいましょう」と約束して別れた。

僧は一旦江戸へ帰り、ほどなく上京の途中、又その宿に泊って女の手紙を受け取るとそれを宇治の親のもとに届けた。棟の高い富裕な家で，女の両親にあって娘の事を告げると、たいそう驚きよろこんで「行方の知れなくなった娘のことを訊ねあぐんでおりました。思いがけなくお知らせ下さって本当に有難うございます」と，早速使いの人を仕立て，身代金なども十分用意して送り出した。娘が帰ってくるまでどうぞ御逗留くださいとしきりに頼むので僧がとどまっていると，やがて娘も宇治へ帰って来て対面した。両親は死んだ娘が生き返ったようによろこんだ。茶師が多額の礼金を差し出したので僧は固く辞したがいろいろ嘆願するので少しばかり受け取ることにした。茶師は家に伝わる山吹の製し方を「秘伝ながら」と言って僧に伝授した。その僧の手によって山吹の茶の製法は今も関東にも伝わっているそうである。[46]

人種偏見

江戸時代に人種偏見があったか。あったとすればどのような形で、どの程度の偏見だったか。それを示す一例がある。

横山町三丁目に笹屋半兵衛という大きい糸屋があった。もと京都で競り売りをしていたのだが大儲けをしたあと手代を五六人置いてしばらくは賑わっていた。しかし大店を出してから七八年後、立って行けなくなって自殺した。その原因についての話である。

ある年、笹屋半兵衛が吉原へ行って商売をしたあと、帰り道は田圃を通って田町の非人（新平民、部落民）の小屋の前まで来ると、声をかけられた。その家の女が糸を買いたいという事なので小屋へ入って行くと相当な量を買ってくれた。その後半兵衛は度々非人小屋へ行くようになってそこの人々になじんだ。

小屋の中で一番裕福な非人頭の善七には娘が一人いた。半兵衛が上方で学んで来た考え方によると、金さえあれば世間に受け入れられる。乞食でも非人でも金があれば世間は受け入れる、というものだったので、 半兵衛は別に偏見なく娘とさかんにたわむれた。娘もはじめは半兵衛がなぶっているのだと思っていたが、月が重なると子供も出来たので夫婦の約束をした。しかし親にはまだ知らせず、半兵衛は忍びながら通っていた。

---

[46] 耳袋 2:7-8。

臨月近くになって娘を連れだしてから娘の親に知らせると、善七も娘のためを思い、半兵衛に金を五百両与えて横山町に店を出させ、その上生活の補助金も出してくれた。 善七はおよそ二千両も娘と半兵衛のために入れてくれたのである。楽な所帯なので半兵衛の女房も女中やそのほか見世の糸繰り女を五六人召し使って、町見物、芝居見物、そのほか遊山に出かけてたのしんでいた。

すると因果なことに半兵衛は店で働く宮と言う女に手を出して妊娠させた。それを発見した女房はたいへんに腹をたてて小屋へ帰ってしまった。親もおおいに怒って半兵衛に出費した金の返済をせまった。それを告げに来た使いは、横山町の手代たちが見知っていた豆ぞうという浄瑠璃語りの非人の男だった。手代や女たちはみんなびっくりして、さては今まで店のお内儀としていばっていたのは非人小屋の娘だったのか、と悔しがって、ただちに暇をねがって店を出た。無断で自分の家へ帰ってしまった者もいた。問屋や商売先もその事を知るとさっそく勘定の催促、商品の返還など要求して来た。

半兵衛はとても店を続けて行く事ができないと悟って、あきらめて残品を全部始末して金に変えた後、 戸塚の台まで逃げて並木で首を吊って死んでしまった。聞く所によるとその時は懐中には紙一枚もなく、金子もおおかた盗人に取られたのだろう、何も見つからなかったということだった。[47]

根強い因習の偏見がむき出しになっている噂話である。もうそんなことはないと思うが、今でも日本人の民族的偏見がすっかり無くなったとは言えないだろう。封建社会に生きた人々は何時も縦の関係の中に身を置いていたので、自分と他人の関係が全く平等という事は少なく、必ず何らかのちがいで上下の関係をつけていたのだろう。同じ中流や下流のグループ内でさえ、全く同じという関係には満足できず、どちらかが上だとみなされている方が安心できたのだろう。小市民たちは自分は隣の八兵衛よりも少しは金を持っている、とか、家柄がねっからのどん百姓ではないのだ、というような小さなことで、ひそかに区別を付け、優位観を持っていたのかもしれない。だから相手が非人ともなれば用捨なく差別して付き合いなどしなかったのだろう。

半兵衛だけの態度についていえば、大坂から割り切った金銭主義の態度を学んで来ていて偏見なく善七の娘を妻にしたように見えたのだが、やはりそうではなかったのだ。簡単に店の女に手を出したということは妻をすこしも尊敬していないということである。妻の親にはさんざん金のことで世話になっておきながら、その娘を娶ったのは金が欲しかったからだといわんばかりである。そういう汚ない根性の男が罰せられるのはかまわないが、使用人たちが昨日まで大店の女主人として尊敬していた女性を一日で小屋ものと軽蔑して出て行ったのはあまりにも単純すぎるし人間味がない。善七の娘も店を守るとか夫と協力するということはせずに毎日遊山に出歩いていたという欠点があったことはたしかだが、一夜で雇用人たちの態度が変わった。

人種的偏見のために昨日まで栄えていた店が瓦解してしまったとは何とも悲惨な話である。

奇病異病

江戸時代の奇病というのは説明のできない変な病気ばかりで読者には気の毒だが変わっていて面白いと思うのでこれらを紹介する。

奇病異病１： 体中の針

滝沢馬琴は梅という娘の奇病について神田の名主がお役所へ訴えた書面の写しを見た。それに寄ると十四歳の梅は母と祖母と三人で洗濯物などしてようやく暮らしをたてていたが、十七歳の兄の友次郎のつてで薬種屋の松屋次助の家の手伝いに入った。すると暫くして梅は何となく気分が悪くなり、湯に入った時手足その他が所々変色して腫れているのを見つけるようになった。梅は胃けいれんが持病だったがそれとは別の病気らしかった。 松屋次助は薬屋なので色々な薬を使ってみたが変わりはなかった。それで梅は家へ帰ったのだがそののち腕や足膝等が痛む事がしばしばあった。

---

[47] 江戸真砂六十帖広本、p. 69。

何ヶ月かして何とか全快したので、梅は今度は正式な奉公人として神田お玉池の幕府の御用町人、川村久七の家に雇われた。すると二三日してから又気分が悪くなって食事もできなくなった。それで奉公に出てから十日たらずで又家へ引き取られ介抱されたのだが、体中あちこちがしきりに痛むと言ってたいへん苦しんでいた。母親が痛む所をさすってやった時、乳の下の皮と肉の間に針が見つかった。その針の先が皮を貫いて 飛び出したので爪で引き抜いたのである。その後もまた首のあたりから一本、膝から二本、小用の時陰門から三本、針が出て来た。どれも少しも錆びていない絹縫針だった。

外科医者に見てもらうと、医者は皮膚の下で場所が悪く、治療のしようがないと言い、放っておくより仕方なかった。その時は鳩尾のあたりに針が四五本残っている様子だったが、何日かしてそのあたりから長さ二寸余りの木綿仕打針が一本出て来た。後に調査のとき、梅も母親のきんもそれは錆びていたと証言した。

名主が何が原因なのかいろいろ問いただしてみた。すると梅が薬屋に居た時、その家の座敷や二階で、畳が小便ですっかり濡れて下の床に滴り落ちるという事が度々あったそうである。それは誰の小便かわからず、梅がしたことではないのに梅が疑われた事もあった。又薬屋が他の町へ引越した後、夜梅が寝ている傍を鼬が走り回り、梅の布団の中に入って来ておびただしく小便をしたという。それが度重なったので梅はだんだん気分が悪くなったのだそうである。何としても奇病のようであり、最近では近所で狐狸の仕業ではないだろうかと取り沙汰されるようになったので、名主の源太郎が官府にお調べを願う手紙を書いたのであった。

これについて馬琴はその後、有名な蘭学医者の杉田玄白と語り合ったり文通したりした。玄白は鼬の妖怪は狐狸と同じようなのだろうかと訊ね、馬琴はいつもの癖で博識をひけらかした。「鼬の怪は『平家物語』に書かれている。治承四年(1180)五月十二日真昼ごろ、鳥羽殿におびただしい数のいたちが入って来て騒ぎ立てた。法皇が近江守に(平家物語では近江守仲兼、その時は蔵人)申し付けて安倍泰親に占わせられたところ、泰親はすぐに、三日の内に御よろこびならびに御なげきがあるでしょうと占った。すると果してそういう事が実現したそうである。「その外狐狸と同じような怪談は和漢に所見がありません」と馬琴は書いた。これは平清盛によって鳥羽殿に押し込められていた後白河法皇が、平宗盛の懇願によって八条烏丸の御所へ帰ることができることを陰陽師の安倍泰親が予言したのである。[48]

「三日のうちのお嘆き」の方は後白河法王の皇子高倉宮以仁王が、無法極まる平家に堪忍の緒を切らせ、源頼政の薦めによって平家討伐のために兵を挙げようとしたが、その計画が漏れて謀反者としてて平家に追われ三井寺に逃れたことである。

更に玄白が前述の鼬の件をどう思うかと訊いたので馬琴は「それは鼬の仕業だと思ったのですが、鼬ではなくて尾さき狐のせいではないでしょうか」と答えた。[49]

この後馬琴は「尾さき狐」の詮索に専念して延々と尾さき狐についての自説を述べている。梅の不思議な病気の話から全然離れてしまって病気の説明にも杉田玄白への回答にもなっていない。少女の体に縫針が何本も入り込んでいる理由や経過、その針が錆びているのといないのがあるのは何故なのか。体の中の針と尾さき狐か鼬の小便の関係は何なのかは説明も推定もない。そうして馬琴がその奇病は狐や鼬には関係なく「尾さき狐」だと断定した理由もわからない。針を間違って呑み込むと体のとんでもない所に出て来るというような話を聞いた事がある。けれども好んで何本もの針を呑み込むような気狂いはいないだろう。それにしてもそんな奇病の話は一度も聞いたことがないので、もっとはっきりしたことが知りたい。その結果はどうなったのかも知りたい。梅はかわいそうにどうすることも出来ない痛みに一生苦しまされたのだろうか。 江戸人のように「何と言う因果だ」と 言いたくなる。

このように回答がちゃんと出ていなくて苛立たしい思いをさせられるにしても、時代が１５０年も前になると病気までずいぶん変な奇怪なものがあったのだなあと好奇心を駆られる。

奇病異病２： 応声虫

---

[48] 平家物語、上, 310-311。

[49] 兎園小説、 p. 44-46。

伴蒿蹊の『閑田次筆』に応声虫という現象のことが二カ所に出ている。一件は百姓の妻の腹中から人声がして病人の声に応じて物を言った話である。腹話術者のように聞こえるがそうではないらしい。もう一つの長い話の前置きとして、伴蒿蹊は「私が怪談好きだと言う人はそしらばそしれ、実際にあった奇話を記しておく。これは門人某が来て話したことである」とことわっている。

烏丸四条の近江屋吉某という職人の妹は同じ街の綾小路の同職、藤某へとついだが、藤某には美人の恋人がいたので、しいて難を付けて新妻を離縁してしまった。その妻はおとなしくよく勤める女だったので姑には気に入られていた。 深く傷つけられた妻は心中恨み嘆いたけれども表には出さず親の家に帰ってひっそり暮らしていた。藤某は望みのままに前からの恋人を迎えいれた。

ある時吉某の妹は知人を訪れて、自分が藤某に嫁いだ時に持って行った嫁入道具を自分の母の隠居所へ送ってもらって欲しいと頼み、自分は寺参りに行くからと言って出て行った。其の家では彼女が暑い日中に傘ももたず、普段着で外出した事を不思議に思ったが、彼女が言葉すくなに頼みごとだけして出て行ったので望んだ通りに人をやって、事情を説明してそれらの品を彼女の母の隠居所へ送ってもらった。

女はそのままいなくなっていつまでたっても帰って来なかった。家族はあちこち人を出してさがしたけれども行方は知れなかった。相当日を経てからお役所へ訴えたので捜索のおふれが町中に出されたけれども、その死骸さえ出て来なかった。

するとその頃から、藤某の後妻が不思議な病気になった。腹の中で物を言う者がいる。応声虫のようだといっても、これは応声虫のように人声に答えるのではなくて、腹の中から虫が問いかけてそれに答えなければ女は胸が迫って苦しいので、他人と話している時でもそれを差し置いて腹の方に答えなければならないというのである。

いなくなった女の三年の仏事の日に、思いがけなく藤某が吉某の所へ商売について話しに来た。仏事の途中なのに藤某が商品を見たいと言ったので吉某は気分を害したが、しかたなく応じた。この藤某は率直でない男なので、つまらない口実を作って離縁した妻の家を訪れたのである。しばらくして藤某は後妻の事を言い出し、妻が病気で三年間病み悩んでいて医薬祈祷と手をつくしたが験がないのだと語った。たとえば、ある神道の験者にたのんで病人に十七日間の祈祷をしてもらった。伴蒿蹊にこの話をした人もその神道者と親しいのでその時いっしょに行って見たが、病人は厄避け祈祷の香炉の煙を見るとあっと言って倒れた。気がついたとき起き上がって「こんなに責められるのは苦しいけれど、責められてもつきものが此の身体を去らないのです」と口走ったそうである。結局その験も効果なかった。

その後間もなく藤某の後妻は死んだが、体は全身紫色になって腐っていたそうである。その後藤某もほんとうの狂人になったので、その家族が檻を作って彼を入れて住まわせている。彼は今も生きてはいるが、その浅ましさは言葉では言い表せないということだ。結果として家もたいへんに衰えてしまったそうである。[50]

伴蒿蹊が自分の怪談好きをそしらばそしれと前置きした程にもなくこれは怖い話ではないが奇妙な話ではある。藤某が妻を粗略に離縁してしまった事、彼女が消えてしまった事と後妻が奇病にかかった事との因果関係はありそうでもありなさそうでもある。消えてしまった吉某の妹はどうなったか全然説明はない。後妻の病気は腹から虫？が話しかけて答えを強要するほか別の症状は書かれていないので何の病気かわからない。応声虫というのは現代では水木しげるの漫画の他には聞いた事もない。全然江戸時代の人たちの想像による病気らしい。最後に体が腐った原因は何だったのかもわからない。この妻は、亡くなってあと夫の藤某が狂人になってしまう程愛していた女性なのだから、魅力のある女性だったのだろうと思うが、それは全然書いてない。飽き足りない掻靴隔痒のような話である。

奇病異病３：　首の小蛇

京都五条の上大黒町に住むある男は伯母と同居していたが、よく働いてだんだん暮らしが楽になってきたので妻を迎えた。が、その妻は伯母を嫌って無作法に振舞い、やさしい所のない女だった。しかし男は妻を追い出すこともできず、伯母を別居させて、一年に三百銭の銀を伯母に贈ることを約束し、

---

50 閑田次筆、p. 442-443； p. 449-450。

気をつけて毎日の食事野菜を伯母の所へ送るように妻にいいつけた。ところが妻は毎日伯母に食物を送っていると亭主には告げたが実は何も送っていなかった。そのうちに伯母が病気になった。

ある日妻も気分が悪いと言って、屏風を引きめぐらした寝床から出てこず、亭主にさえ顔をみせなくなった。二三日もそういう風だったので、亭主があやしんで無理に屏風の内に入って見ると、小蛇が妻の首に巻き付いていた。夫はおどろいて引き放そうとしたけれど蛇は離れない。しかたなく、北野の智宝院といふ修験者を招いて祈祷をたのむと、修験者はこの蛇を引き離すと女は必ず死ぬだろうと言った。死んでも今の苦しみようは見るに忍びない。なんでもいいからただ追い払ってくださいと頼むと、修験者は壇を作って三日間祈祷をおこなった。最後の日に小蛇は女の首を離れたが、そのまま女の口に入って彼女を即死させてしまった。同じ時刻に伯母も死んだということだ。この二人の女性は両方ねずみの歳だったという。[51]

これも応声虫の話のように何とも分からない奇病の話である。伯母と妻の病気は関係があるのかないのか。そうして蛇が首に巻き付くというのは病気ではなくて変事である。ネズミ年の人が蛇によって死ななければならないのなら、世の中には変死する人は全人口の十二分の一くらい、十二支のネズミ年の人全部殺されるはずである。いやな死に方はいろいろあるが、蛇が口に入って死ぬというのは暴死ではなく血も見ないとしても、非常にいやな変死であることに違いはない。上記二人の女性の死についてよく知っている人から聞いたというのだから全くの作り話ではなさそうだけれども信じることも難しい。いずれにしても，女はやさしく親切なければいけないという儒教的勧告である。

奇病異病　４：　江戸版「虫愛ずる姫君」

江戸で有名な巨豪豊田某は紀州藩の御用商人だが、その娘に異様な病気があって、何によらずいろんな虫を食うことが好きなので両親は困惑の極みだという話。 方々手をつくして娘の配偶者にふさわしい男を探したが、誰も貰おうという人がいないので、仕方なく貰ってくれると言った妻恋稲荷の神主に嫁入らせた。この神主は年来子供の虫を封じるまじないのお守りを発行したのが大いに当たり、ついには大奥などにもその符を差し上げ、過分の富を得て贅沢三昧をしていた。

肝っ玉の太い僭越な男で、将軍家とは何の関係もないのに葵の御紋付きの提灯を使うような大胆なことをした。ある夜芝居に行った帰り道で彼が禁制の提灯をさげているのを寺社奉行の土屋が見つけて調べさせた。いうまでもなく妻恋稲荷の祠官などに御紋付きの提灯を持つ資格はない 。彼は不埒にも他にも自宅の高提灯や神具に葵の御紋をつけていたので召し捕られて牢にぶち込まれた。又神社再建の口実で富興行を行ってその金を私的な費用に使うような男だった。神主は富裕な家の富をねらって虫を常食にするような女を一緒になったのだろう。一方、世の人たちはあの良家が娘の奇行を恥じて祠巫などの妻にして、同時に虫封じの呪でその病気を隠そうとしたのだろうと噂した。今は利欲の世というべきだ。[52]

『堤中納言物語』の「虫愛ずる姫君」のように気味の悪い虫が好きだというのだが、あの姫君はただ虫を好んで集めたというだけなのに、此の娘はそれを食べてしまうというのだから気味悪さを通り越す。虫めずる姫君はとくに毛虫が大好きで可愛がったというのだが、此の娘はあえて毛虫を食べただろうか。馬蝿やくさいカメムシなども食べたのだろうか。「蓼食う虫も好きずき」というが、そこまで行くと凄まじい。

そんな気味の悪い娘が結婚したので、世間の人たちが両方の動機を批判的に見て勘ぐったのである。勿論両方が功利を求めて結婚が成立したという結論をしりぞける理由はないが、其の神主は倫理的に非常に疑わしい人間だから娘もその両親も被害者に見える。娘の親はその男の行状や評判を知らなかったのだろうか。「今は利欲の世というべきだ」と著者は言っているのだが利欲の世の中というのは江戸時代に限った事ではなくいつの世でも似通ったものであり，二十一世紀の現代などはもっとひどい。

「寺社奉行の土屋」とあるので調べてみると，土屋という人が幕末に寺社奉行だったのは二人いて、土屋相模守彦直は文政十一年(1828)-天保五年(1834)；土屋釆女正寅直は嘉永の初め(1848-1850)と元

---

51 閑田耕筆、 P．215。

52 甲子夜話続篇７：137-138。

治元年(1864)から明治元年(1868)まで、二度勤めている。著者の松浦静山は天保 12 年(1841)に亡くなっているから土屋相模守彦直の可能性が強い。

奇病異病　　５：　長い妊娠

これは異常に長い妊娠の話で一種の精神病だと思われる。弘化元年(1844)の十一月に神田馬喰町の旅人宿の主人が町役所に奇怪な届けを出した。それは奥州から来て泊っている二人の女についてであった。二人は奥州七戸の紺屋の娘で――娘と呼ぶのは恥ずかしいくらい年を取っているが―― 姉のさなは四十八歳と妹よしは三十七歳という。奇怪なのはさなで、彼女は十七年以前から妊娠しているが出産はした事がない。もともとさなは奥州五戸町の大吉と結婚していたが文政九年(1826)の九月の夜，寝ていた夫婦は同時に襟元に白羽の矢が刺さったという夢を見て、二人とも多量の血を吐いた。しかし夫婦は医者にもかからなかったらしい。とにかくその時さなは懐妊したのだが産月になっても出産しなかった。 彼女の言う所によると胎児が彼女に、汚れた所では生まれたくない、と告げたそうである。その声は他の人には聞こえないのだそうだ。

夫婦は心をわずらわせて数ヶ月祈り続けたが一向に産まれる様子がなかった。夫の大吉は八年前に願をたてて高野山に登ると言って家を出たきりそのまま帰って来なかった。

さなは親の家に帰ったが、しばしば夢の中で、天皇のお住居のある土地を踏まなければ出産はできない、という神のお告げがあったので、思い立って京都に向かって出発した。盛岡まで来た時、国元の役所から変性のものは他国に出る事は許されないという通知が来て親元へ引き戻された。 そのままさなはしばらく家にいたが、又夢の中で京都天満宮へ参詣すれば無事に出産できると告げられて，妹のよしと申し合わせて家族には無断で家を出て来た。江戸表まで来て宿屋の主人に京都へ行きたい理由を江戸にある南部藩の御領主屋敷に届けてもらった。役人が調べに来たのでその話は評判になった。

さなは病気で気が変になっているのかもしれないが，二人の女は南部藩江戸邸に引き取られて手あつく看護された。そうして役人が付き添って上京した由である。[53]

文政十一年(1828)九月の夜にさなと夫が、襟元に白羽の矢が刺さった夢を見て多量の血を吐いたというのに、そのまま平気で医者にもかからなかったというのは異常である。体に矢が刺さって懐妊したというのはギリシャやインドの異婚譚異生譚のようにも聞こえる。とにかくさなの十七年の妊娠はその夢と関係がありそうな書きぶりであるが何の説明もない。十七年の妊娠などというものは医学的に可能なものではない。一方心願をたてて高野山に登ると言って家を出た夫はどうなったのだろうか。始めの九年間は気が変になった妻と一緒に我慢強く赤ん坊が産まれるのを待っていたのだから悪い人ではないだろう。ほんとうに高野山に登ったかどうかわからないが、それを口実に妻と別れたのは無理もない。妻の悲しみを思って嘘を言って家を出た思いやりは認めるべきである。

さなはあきらかに精神異常をきたしているのである。そんな人物をいくら同郷人でも江戸の藩主邸の役人が付き添って京都まで行くようなことがあっただろうか。第一「変性のものは他国に出てはならない」という藩の掟があったのだから、さな達は違法者として罪人扱いにされても仕方がなかったところである。何故か南部藩は態度を変えて破格に親切な扱いをしたようである。ところでさなは役人に付き添われて上京して無事に出産したのだろうか。その大事な所が書いてないが、まずそんな奇跡は起こらなかっただろう。世の中には赤ん坊が欲しくて乳母車の中の幼児を盗む女性もいるそうである。その執念が嵩じれば十七年の妊娠も信じるようになるのかもしれない。

奇病異病　　６：　油食いの娘

世の中には恋わずらいで身を亡ぼした娘は少なくなかっただろうが、これは娘の恋ではなくて恋されて妙な病気になって身を亡ぼした娘の話である。 本郷二町目に質貸しをしながら紙、油など売る店があり、その家の娘は姿形が清らかで心も優しかったので、彼女に心を寄せる者は多かった。その隣の

---

[53] 天弘録、p. 50−51。

家の手代で武兵衛という好人物がその娘に執心して、何か良い機会はないかと待っていたが、おりふし顔を見るばかりで話をすることも言い寄ることもできなかった。

娘の母は読みガルタが好きで正月十五日までは下女や娘を相手に歌留多を取った。 武兵衛はそれを聞いて近付いて仲間に入れて貰い、一夜二夜行ったけれども、相手は少しも武兵衛に反応しないので非常にもどかしかった。ある時ようやくつてを求めて娘に手紙を送ったが、彼女は読みもせず、 母親に隣の若い者が手紙をよこしたと顔を赤らめて言いつけたので、もうカルタ取りにも招いてもらえなくなってしまった。その後は娘を外に出すこともしないので、男は馬鹿のようになり、塀越しに声が聞こえるだろうか、節穴から顔が見えるだろうか、裏の下水を流れる水は隣の娘が行水をした水だろうかと指でなめてみるようなたわけた事さえした。

訳を知る人が武兵衛をあわれんで何とか取り持ってやろうと娘に話してみたが、彼女の心は固く、のちには武兵衛の悪口さえ言い始めた。彼は「口惜しいことだ。俺が人並みの金持ならばこんなに恥ずかしい目にあわなくてもすんだろうに」と明けても暮れても嘆いていたが、いつとなく奉公もおろそかになり体もおとろえて来た。珍しく娘でなく男が恋患いをしたのである。

近所に伽羅の油を売る男がいたがそれも娘に惚れて、一竿三十二文の油を二十八文にまけ、白粉をはずみ、「花の露」を贈物にしたりした。生来口の上手の男なので娘の気に入り、昼夜 入り浸りということもあった。「世のなかにはいい加減な無責任な男がいるが、あれもその一人だろう」と武兵衛は自分の窮屈な心から深く恨んでいたがある夜出て行ったきりいなくなった。

その年の末からその娘は銀出し油を好んでつけはじめたが、あまり大量の油を使うので両親が不思議に思って詮議すると、髪につけるのはごく少量であとは食べていたのだ。両親は叱りつけたけれども病気で油を食べるのでとめることは出来なかった。そのうちに逆上して顔にできものが吹き出し、それが悪化して、ついに十五の年に早世してしまった。

死んでから髪の中からおびただしくむかでのような虫がわき出したということである。 人々は恨まれていたからだろうと話し合ったが、 著者(平秩東作)が言うには、これは恨みの報いではない、病気の業なのである。病気で灰をなめたり土器を食ったりする人がいるがこれらは珍しい病気なのである。

となりの手代の傍輩だった者の語ったことだが、武兵衛は出奔する前に、夜中に起きて物もいわずぶるぶると震えていることが度々だったそうである。人を愛するということは叶わない時でさえ嬉しいものである。恨む道理はない。ただ同情もなく罵ったり辱めたりすれば恨みは深いだろう。それは女の道とは言えない。此の違いをよく知って生死存亡を心とせず、女の道を守って操正しい婦人になることこそ望ましいことである、と著者は言っている。[54]

此のかわいそうな男の恋は奇怪な悲劇で終わっているが 著者が評しているように、勿論少女は恋の恨みの祟りなどで死んだのではない。 武兵衛には少女を惹き付ける魅力がなく、娘が好きになれるタイプではなかったのは運が悪かった。娘も運悪くへんな病気になって十五才で死んだというのだからずいぶん若い少女で、人情や恋などはわからなかったのかも知れない。八百屋お七と同じ位の年だが、十代の少女は人によって情緒的成長の度合いがずいぶん違うのである。

その病気の話は始めの武兵衛の失恋物語と関係があるのかないのか。武兵衛は消えてしまって生きているのか死んだのかもわからない。その後この娘の髪の中におびただしいムカデのような虫がいたというのは何なのかわからないが気味の悪い話である。それは武兵衛のせいではない事は確かである。油を食べ過ぎたという事と虫の湧き出たことと何か関係があるのかも知れない。多分油の好きな虫だったのだろう。頭にわく虫というのは大体虱が多いようで其の外に 人間の体にもぐりこむダニがいるそうだが、それらはムカデのような形をしていない。

この話の終りに平秩東作は女の道という事について説教をしているが、この話の中に讀んだ人の教訓になるような要素は少しもないのでこじつけも甚だしい。これはただの噂話である。

---

[54] 怪談老の杖 p。41-43。

奇病異病　　７：血余髪

江戸の某婦人の髪の長さは九尺ばかりで、普段はその髪を三尺以上引きずって歩いていた。毎月三四尺切って捨てたのだが、忽ち又三四尺伸びるのだった。今は髪をそってしまって尼になっている。

又他の昔話によると、ある婦人が髪を結うと一晩でバラバラに解けた。そうして夜になると彼女が寝ている間その髪は散らばって揺れ動くのだった。人々が気味悪がったのである医者がこれを治療した。まず夜更けにその髪の動揺するのを見て髪を手に取り短刀で根元から切り、すぐさま沸騰している湯の中に投げ込んだ。すると髪は忽ち血に変化したという。そうしてその後は髪の煩いはなくなった。医書によるとこれは皆血のなすところであり、髪を血余と言うのだと書いてある。この髪を器に入れて焼くと全部血に変わってしまう。又薩摩桜島の農夫の首に瘤があったのを医生土橋氏が取り除くと中に細毛の塊があった。それを分解してみると牛の毛のような長さ一寸ばかりの毛がこんぐらがったものだった。[55]

髪の毛が血に変化する話と百姓の首の瘤の話とどんな関係があるのか，と聞きたいがやはり髪の毛の話だから終りにくっつけたのだろう。女の髪の毛は美しさの象徴にもなるけれども，時には気味の悪い話の道具にも雇われる。血はもちろん人間の体の健康と密接な関係があり，髪の毛も健康と非常に関係がある。しかし髪の毛が湯に入れたり焼いたりすると血になるというのは化学的に可能だとは思えないからこれは全くの作り話だろう。

奇病異病　　７：血塊

享保七年(1722)、二条富小路のあたりに鮫屋某というものがいた。 娘は嫁に行っていたが，血塊という病気になったので養生をするために家に帰って来た。その病状は臍の下に塊ができていて、それが左右に動いて非常に痛むのだった。食事は全然すすまないので、まるで骨と皮になってしまった。数十人の医師がいろんな破血の効剤を用いたが一向に効き目はなかった。鍼、灸、祈祷すべてをためしてみたが効果は空しく、娘は床に寝たきりだった。

今年で発病して三年目になるのだった。するとこの九月急に産気がついてたちまち一人の男の子を産んだ。産後は親も子も安らかに無事だった。あの変な臍の下の塊を探したが何もない。さては三年来の血塊は懐妊だったのか，しかしこのような症状は医書には書いてはないと此の病人をずっと診て来た医者が言った。[56]

十七年間の妊娠（奇病異病５：長い妊娠）の話と同様、こんな非科学的なバカな話があるはずはないから虚説であろうが、それに臨床していた医者が語った話だというのが怪しい。どんな噂話もそれを記録した人は「ウソ」を書いていると思われるのを極力避けるために色んな人たちに証言させている。著者を信じるべきか、医者を信じるべきか。しかしそんな事実は存在し得ない時にはどちらも嘘っぱちだと思うより仕方ない。

眼科医

なかなか頭の良い奥さんの話がある。西川某と言う浪人が目を患ってさまざまに治療を試みたけれども一向に効果がなかった。その妻はよい医者を捜そうとしてここかしこ歩きめぐり、自分の健康な目を盲目だと偽って診察を受けた。けれどもどの医者も彼女のウソが見抜けなかった。色んな医者が落第したが、最後にとうとう本所の某眼科医がこの女の目を見て、「これはあき盲目ではない、よく見える健康な目だ。どうして私をあざむこうとしたのか」と怒ったので女はその理由を言って深くあやまり、

---

55 中陵漫録、p. 129。

56 月堂見聞集　上巻p. 234。

夫の眼病を見てもらったところ、ほどなく全快したそうだ。この女の知恵は深く、ことに貞節の心があった、と著者の友人桃英が語った。[57]

私も白内障緑内障の同時手術をしてもらったけれどもまだ眼圧が少しずつ上っているそうで定期的に検査してもらっているのでこの女性には感心した。夫の眼病が全快したのも妻の知恵で名医をさがしあてたからこそである。江戸時代には医学教育をきちんと受けないで看板を出す医者も多かっただろうから夫の眼病はなかなか治して貰えなかった。しかしいくら医学が進んでいなかったとしても、何人もの眼医者が偽の盲目を見抜けなかったというのは信じがたい。

今はどんなヤブ医者でも偽盲目くらい簡単に見破ってしまうだろう。しかし名医というだけでなく、自分の性格とよく合い、コミュニケーションがちゃんとでき、心から信頼できる医者というのは中々見つからないものである。どんなに有名な医者でも患者が医者を必要とする時、二ヶ月先まで予約が取れなかったり、忙しすぎて話もろくに聞いてくれない医者では役に立たない。近頃はそんな医者が実に多くて、予約がしてあっても一時間待たされたあげく、実際に医者に会うのは五分という事が多い。

この頭のいい奥さんは医学者の無能無力に呆れてこういう方法を考えたのだが、私たちも政府が健康管理法や健康保険問題について法律を改正するのを何年も待ち続けている。これはアメリカではもう社会福祉や厚生の問題をはなれて呆れるほど政治的な問題になってしまっているので解決がつかないのである。

百夜通い（江戸の小話）

ある男が女に恋をした。プロポーズすると、女は「もしあなたに百夜通って来るような真心があればお心ざしをお受けしましょう」と答えた。男はお安い事だ、と言って早速翌日から雨の日も風の日も通い始めた。そうして女の家の庭の木にしるしをつけて帰るのである。それが九十日も続いた頃、大暴風雨が来た。窓から大雨大風に荒れ狂うる庭を見ていた女は男が箕笠を傾けてやって来たのに心を動かされた。「今夜はお泊りなさい」と呼びかけたが男は無視して帰ろうとした。「あなたの誠実な心はよくわかりました。もう百夜来なくてもいいのよ。お泊りなさい。」と言うと男は振り向いて怒鳴った。「なんで俺が泊らなきゃならないんだ。こっちは此の雨風だから早く帰りたいんだ。俺は雇われてんだよ。」[58]

これは松浦静山の書き写した笑い話である。江戸時代の小話、笑い話というのは多いが，全部が全部現代人に通じるわけではない。しかしこれなら現代人でもわかる。古典や伝説を茶化した話は多く、深草の少将の百夜通いなどはよく知られているし笑い話にしやすいので，これは成功している。どの時点からこの男が雇われて毎夜の記録に通ったのかわからないが，女の方は通って来る人間が変わったのに気がつかなかったのは始めに言い寄った男をちゃんと見ていなかったのだと見える。

女の禿頭

二代目尾上菊五郎の女房はおとよと言ってそのころ評判の女だった。のちに市川団蔵市紅、三代目団蔵へ嫁して連れ添った。ところが、おとよには誰も知らない秘密があった。頭の、耳の上にできものができて禿げてしまった所があったのである。そうしてそれをかくすためにつげの櫛を横にさした。その様子がいきでよかったので島の内の芸者や、江戸の女たちなどがそれをまねて貴賎そろって櫛を横に指した。横ざしの櫛をはやらせたのはおとだという。[59]

とんだ怪我の功名である。櫛を横に指したのは誰も考え出さなかった櫛の使い方でスタイリッシュで個性的だったのだろう。世の中にはこういう、何を着ても特徴のある、彼女にしか考えつかない着物や装飾品の使い方をして、それを最高に生かすことのできる女性がいる。おとよはそんな感覚のすぐ

---

[57] 野乃舎随筆、ｐ．87。

[58] 甲子夜話続編　２:27。

[59] **三升屋二三治戯場書留、**p. 13。

れた女性で、いかにも魅力的だったのだろう。マイナスをプラスにすることのできる女性は頭のいい優れた女性である。

半禿の女

京都の町人某の妻は結婚してから七八年になり子供も一人生まれた。此の子が幼い頃、乳を口に含みながら手で母親の頭の鬢(びん)の毛を引っ張ったので鬢が落ちてしまった。その女は元来鬢が片方禿げていて毛がなかったのを鬘(かつら)をかぶって鬢が両方あるように見せていたのである。それを七八年間夫にも知られずに、隠しおおせていたのに，思いがけず子供にばらされてしまった。女はおおいに赤面し，夫もはじめて妻の鬢がはげていることを知って驚いたと言う事だ。

すべて京都の女はたしなみ深く，朝寝起きの顔を人に見せるようなみっともない事はしない。髪も何時もきちんと整えている。朝起きる前にあらかじめ髪を撫でておくれ毛を繕ってから厠へ行くのだそうだ。京都の下女は台所の仕事が終わって人が寝静まってから行灯にむかって灯心一筋の先で髪を結ってその後で寝るのだそうである。朝は忙しくて時間がないから髪を結うことはないのである。[60]

昔から髪は女の命などと大げさな事がいわれ、たしかに今でも髪は女性の魅力のひとつだから、化粧法の発達していなかった江戸時代、頭がはげていれば致命的な欠陥であった。この話の女性はどうして片鬢がなかったのか、ガンの治療で脱毛する場合もあるがこれは明らかにそうではない。どちらにしても、尾上菊五郎の女房おとよにしてもこの女性にしても、はげは本人の罪ではない。子供の罪でもない。これで御主人の愛想がつきたのなら…悲劇のような喜劇のような話である。

朝の化粧をしない顔をぜったいに人に見せないように、というのは春日局が大奥女中達にきびしく言いつけた事だった。清少納言も寝起きの顔はみにくいものだから早起きする方がいい，といい，昼寝起きのまずい顔の寝ふくれ、てらてら光る顔のみにくさを遠慮なく批判している。[61]　大奥などでは朝十時に「総ぶれ」があって将軍が大奥に入り御台所その他との挨拶があるが、それまで女中たちは男性に会う事はない。その後でも男性禁止の大奥では男性に会う事は少ないのだが、春日局は女性同士でも化粧しない顔を見せるのははしたないことだと教えた。だから大奥の女性は将軍の御台所もふくめて朝は非常にいそがしかった。

小宮山楓軒が書いている事によると、江戸時代は小身の武家でも下女のいない家はなく、新年にはどの家でも妻と娘は必ず夜明け前に髪をとかしおしろいをつけて、着物に総もようの打掛姿で来客の賀を受けたそうである。[62]

しかし美の標準は変り続ける。現代では若い人ならば化粧しない健康で新鮮な顔の方が魅力があると思うだろう。げんにおしろいをこてこてにつけた芸者や京都の舞妓は、それはそれで雰囲気があるのだが、今日は普通にそんな白粉の付け方をする女性はいないだろう。

鼠小僧の女

天保三年(1832)五月四日に浜町松平宮内少輔の邸でねずみ小僧が召し捕われた。次郎大夫という名前だったが、誰も本名など知らないで鼠小僧というあだ名で江戸中に鳴り響いていたドロボウである。此の男はきちんと何時何処の邸でどれだけの金を盗んだという記録を残していた。一方なかなかの遊び者で吉原にもよく行って、ある遊女となじみを重ねていた。吟味中、与力がそんなに吉原で金を使い捨てる位ならその遊女を請け出した方がよいのではないか、と訊いたときに答えた。「女郎は女郎として買って遊ぶ事が楽しみなのです。女房にしてしまえばただの女です。通ってこそ面白みがあるのです」

60　譚海、p. 271。

61 枕草子，上:264。

62 懐宝日札、p. 223。

と言った。取り調べの与力もその言い分に当惑したそうである。こういう考え方や言い分は普通の人間と違っていたそうだ。

ねずみ小僧の家らしい所が四カ所あってどの家にも女がいた。しかし捕われる前に皆別れ状を与えておいたそうだ。その四人の一人、住吉町に住んでいた女は男が盗みをする事をさとってしばしば意見をしたけれどねずみは聞きいれなかった。それで女は別れる事を宣言して家を去った。その後この女は独住居を守って男を決して家に入れなかった。ねずみは何と思ったのか、一年に一度は必ず贈物をたずさえてその家へ行って家主に会い、その女のことをよろしく頼む、と挨拶して行ったので家主は不審に思っていた。後になって彼の事を知ったのだそうだ。[63]

女と結婚してしまえば面白くない普通の女になる，と言うのは東西の遊び人の間ではかなり普及した考えであるらしい。柳沢淇園の『独寝』にもそんな意見が出て居るし[64]欧米でもそんな考えの男がいつまでも独身で居る。結婚している多くの男性は、独身を羨むような事を言ったり、結婚を後悔していると言ったり、結婚が何もかもぶちこわしてしまった、などと平気で口にする。それは人を笑わせるために冗談に言うことが多いのだが，とにかく結婚は幻滅の根源だと思ったりそれを広言したりする男は非常に多い。

結婚すればただの女になると言い切った鼠小僧は、四人の女の一人が彼の悪行に愛想をつかして自分から身を引いた時に未練が出て来たのだろう。そんな女の見識に少し尊敬を覚えたのではないだろうか。それで一年に一度とはいえ、毎年贈物を持って来た。女は自分の男が盗みをする事はさとっていたが、鼠小僧という有名な盗賊とは知らなかったのだろう。結局江戸時代の男の間にも、自分の言うなりになる女などつまらない、という気持があったのかもしれない。しかしその同じ男たちの大部分が，妻は絶対に自分の命令に従い，夫の望み通りに振る舞わなければ妻ではない、と言う態度だったのだから矛盾していた。

大阪の淫風

久須美**祐**雋が大阪奉行をしていた時に書いたことによると、大阪は一体淫風が盛んで婦女子の風儀がよくない。結論として利益を追う風俗だから自然に恥知らずになっているのだ。婦女子を使って儲けようと計画するときは自然と風俗が淫猥になる。大阪では男は商人が多くてひたすらにもうけることに励んでいるし、親や夫は娘や妻が淫らなことを責めないので女はますますその風に流れて行く。当地では子供を捨てる者が多い。これ又淫風が盛んな証拠である。少なくとも大抵月に四人五人、多いときは二十人余の捨て子が出るので、奉行として心が痛む。

劇場が殊に繁盛する土地柄なのは風俗が淫らである故だろうか。劇場見物に出る婦女子の様子なども江戸とはおおいに違って、狂言を見物するのではなく、俳優の姿容貌を見物し、且つ自分の着飾った姿を俳優どもに見せびらかすのが目的なのである。だから、相当な財産を持っているものは一日の芝居見物の間に衣服を替えること三四度に及び、甚だしいものは一幕毎に着替えたりする者がいるという。浅ましい風俗だというべきだ。[65]

久須美**祐**雋が奉行として捨てられる子供が多いのに心が痛むと言っているのはたいへん人間味があっていい。彼は大阪の商人が女を利用して儲ける事に批判的でありながら女性を相当責めている。

また、彼が言っている「大阪は風俗が淫風だから劇場が繁盛するのだろうか」と言う推論は間違ってはいないが逆の方が真ではないだろうか。劇場と浄瑠璃歌舞伎文化がやたらと発達繁盛していたから、そもそも俗気の強い風俗がますます淫風に流れたのではないか。荒唐無稽な話の筋に残虐エログロが流行した幕末の舞台は、衣裳もきらびやかだったし、眼もあやな装置には多大の資金がかかっていただろう。そういう舞台を毎日見ていれば衣裳はだんだん派手になり、考え方や態度は自堕落で非人情になり、舞台で演じる色欲や犯罪が日常の基準のように考えられ、化粧は歌舞伎役者なみに厚くなり、ひ

---

63 甲子夜話続編　7： 111-112。

64 独寝、p. 61。

65 浪華の風、p. 392-393。

いきの役者に見せるために日に三四度も衣裳をかえることになっただろう。それは全く幕末の時世粧の典型を体現したものだった。

今でもテレビや映画に現れる風俗や事件を現実と混同する子供達がだんだん不感症になって子供にふさわしくない性行為に走ったり、暴力をふるったり簡単に銃で人を撃ったりする事件が多くなっている。これは映倫管理委員会（映倫）や日本ビデオ倫理協会（ビデ倫）の領域になるので私の出場所ではない。アメリカの映倫の決定権は独裁的であり、しかも非常な秘密主義で透明を欠くそうである。兎に角アメリカの風俗が淫風だから劇場が繁盛しているのではなくて，演劇ドラマ、映画テレビが時世粧を支配しているとしか思えない。

菓子屋の娘殺し

真言坂の北高津鳥居前の西南に金子という菓子屋があった。その家は累代の古い家で、今芝居になっている金子娘殺しの騒動はこの家で起ったことである。文化（1804-1817）ごろに起ったのだが、殺された娘の婿になるはずだった人は近年まで健在で七十余歳で亡くなった。その人は筆者の知己、飾磨産の人で大坂で占い業をしていた。

金子屋騒動があったころは女主人で、娘が一人いて手代、丁稚、下女などを使っていた。 手代の一人は阿波生まれの、生来少し愚かしい男だった。平常近所の者がからかって，「お前は此の家の娘の婿になって金子の家を継ぐのだそうだ，」と冗談をいうと彼はそれをまに受けて信じて喜んでいた。そのうちに彼は休みをもらって故郷の阿波へ帰って行った。

その不在中に娘の縁談が決まった。その相手が此の物語をしてくれた人である。彼は金子の親類だし，聟にちょうどいい年齢なので遠からず娘と夫婦にしようという約束が成立したのである。その話は近所の人たちの耳にも入っていた。阿波の男は休みから帰って来て元通り勤めようとしたのだが、彼の帰りが予定よりもだいぶおくれたので、女主人はすでにかわりの手代を雇っていて彼の服帰をことわった。彼は大いに落胆してなじみの隣人の所へ行って話すうちに、娘の婿が定まったということを聞いて驚いた。彼は傷つきおおいに憤った。そうして考えたあげく決心してその夜更けに金子の家に忍び入った。蚊帳のなかに寝ている女主人と娘を刀で殺害し，手代、丁稚、下女などを傷つけ，自分も死のうとしたが、刀で死ぬことが出来なくて井戸の中に飛び込んだ。

夜が明けて，疵を受けた手代が這いながら道頓堀角の劇場の前の金子の親類の芝居茶屋までたどり着いて一部始終を語ったので、主人は驚いて金子の家へ駆けつけ，お役所へも訴えたので急遽検死の役人が菓子屋へいそいだ。ちょうどその前夜に、当時有名だった芝居作者が今橋の旅館で友人たちと宴会をして、夜がふけたのでそこに泊っていた。そこへ劇場から銀主の手代、頭取などが馳せ集まって金子の騒動を告げ，切り狂言に出したいから至急に戯作してくれと依頼した。作者は同意して駕篭を命じ、道頓堀に来るまでに駕篭の中で狂言の筋立てを考えた。その日ただちに『鐘鳴今朝噂』と芸題を書いた看板を出し，俳優たちににわか稽古をさせて翌日から金子の芝居を公演した。喜んで見に来た民衆で小屋は毎日大入りだった。

騒動のあった家の女主人と娘は死んでしまったので跡継ぎもなく家は絶えた。筆者が少年だった頃、真言坂の角、騒動のあった家の向かい角に金子というのれんを掛けた菓子屋があったがこれはどういう関係だったのか知らない。親戚だったのかそれとも関係のない別人だったのか、それをこの話をしてくれた人に問うのをすっかり忘れていた。その金子菓子屋も安政ごろ(1854-1859)にはもうなかったように思う。[66]

女主人もその娘も全く落度はなかったのに不測の災難を受けた。彼女たちは近所の者たちが手代にからかい半分の嘘を言ったことなど知らなかっただろう。殺人者が愚か者だった事と近所の者たちが無責任な事を言ったのが悲劇の原因になった。 著者にその話をした人も許嫁を殺され、継ぐはずだった累代の名鋪菓子屋は潰れて、しがない占い師で終わってしまった。此の話は本人の占い師が姓名不詳の著者に話したのだから実話だろう。

---

66 浪華百事談、 p.214-216。

それにしても殺人事件が起こった次ぎの日にすでにその話の芝居興行をしたというのは空恐ろしい商魂である。大阪人の商魂と芝居好きが結合すれば悲劇が大儲けの種になる。

美女と牛

東の洞院だったかに牛車を繰り出す所がある。ある時牛飼いが牛車に沿って道を歩いて行くと、向うから美しくよそおった年三十ばかりの女が歩いて来るのに出会った。牛はこの女を見ると立ちどまって先へ歩むのを拒否した。女もなぜかすくんでしまって動かない。牛飼いは経験から心得ていて、このような時は女の 褌（腰巻き）をはづして牛の眼を隠せば牛が動き出すのだと言い、その女に頼んで褌を脱いでもらった。その赤い腰巻きを牛の眼にかけると、果して牛は動き出した。女も動けるようになったので褌をかえしてもらって歩き出した。しかしおかしなことに女は家へ帰ると間もなく亡くなったと言うことである。まるで昔話のようだがこれは現在近頃起ったことである。[67]

立ち止まって動かない牛の眼を女の腰巻で隠したら動き出したというのは奇妙で，そう言う謬説を作り出すのに格好の事件である。動物でも美人を見れば心を揺さぶられるという事は實例や歴史があるわけではない。牛は別に美しい女を見たから立ち止まったのではなく、他の理由で立ち止まったのかも知れない。そうして、腰巻きでなくても何かの布かむしろで牛の目をかくせば歩き出しただろうと思う。女の褌を使うというのは男たちが考え出した少し刺激的なおまじないだろう。しかしこの事件で女がなぜ死んでしまったのか、これはわからない。牛に見込まれたという怖れで心臓が止まったのだろうか。きっと日頃めったに外出しないかよわい女性で、このちょっとしたショックの後でやっと家にたどりついたのだろう。

妻の一心

何時頃だったか本町に伊勢屋と言う相当豊かな町人がいた。一人息子は道楽者で親族の意見を聞かず、 家出をして長崎奉行の家来になって九州へ行ったが、長崎で以前の癖が出て芸者のような女と深くなじみ、奉行が交替した時もそのままその地に残ってその芸者と結婚し、借家を借りてわずかな商売を始めた。しかし一年も立つうちに江戸が恋しくなった。昔の不品行も後悔したが妻をつれて江戸へ帰ることも出来ず、妻を置き去りにして長崎を出てしまった。

妻は悲しんで後を追って江戸に出ようと思ったが、女の身ではとてもそんな大旅行は出来ない。乞食になるより仕方がないと思って、狂人の様子を真似て、大へんな苦労をしながら江戸までたどり着いた。夫の家が本町の伊勢屋と言うのだとはかねて聞き知っていたのでその門に立つと、若い者が出て来て見苦しい乞食が物もらいに来たのか、と咎めた。女が若旦那にお目にかかりたいと言うと手代共はいよいよ怒って、お前のように汚い乞食に若旦那が用事があるわけがない、と言って叱りつけた。女は一生懸命に、「お目にかかりさえすればわかることです」と言って動かなかった。

手代たちは大いに怒って「叩け」などと言って騒ぎ出した。若旦那は長崎から帰って来たあと、親類の中介で親に詫びを言ってゆるしてもらい、それからは大人しくしていた。表の方が騒がしいので出てみると、長崎でめとった妻だった。今は隠しておけず、親にしかじかのわけを語ると、親は「それほど真心のある女ならばまず台所の方へ呼び入れなさい」と言いつけた。勝手の方から入らせて夫が事情を訊くと「お慕わしさに長崎を出て、千辛万苦をへてやっと参りました」と言った。まず風呂へはいらせて髪を結わせると息子が迷ったのも当然と思えるくらいの絶世の美人だった。父母も彼女の様子から心のよさや真心を感じて大変に喜んだ。

伊勢屋の主人夫婦はこの美しい女を娘にするのは嬉しかったがここに一つの問題があった。息子には最近縁談があって、富裕な町家から嫁を貰うことになっていた。結納も交わしていたし今更解消するわけにも行かないだろう、と仲人にあれこれ相談すると、正直に嫁の親へわけを話し離縁してもらうのがいいだろう、ということだった。

---

[67] ささのや漫筆、 p . 194。

そこで伊勢屋は相手の家へ行って、「こう言うわけで、はるばる遠国から訪ねて来た者を心無く突き放すのも哀れなことです。全く申し訳ないけれども離縁にしていただけないだろうか」というと、相手の親は立派な了見を持った人で「委細おっしゃることはよくわかりました、けれどもこれは簡単に決められないことですから後でまた参って御返事しましょう」と言った。

伊勢屋夫婦がどんな返事をくれるのだろうか、と手に汗を握って待っていると何時間かしてから帰って来た。挨拶をすませてから言ったことは、

「委細先刻お申し越しの件は道理のあることですから承知したいとは思うのですが、一旦縁組みをしたのですから今更離縁と言うことは傷のない娘に傷を付けることになります。色々しなければならない支度もありますので，今日はこれで、そうして明日結婚式ということにしていただきますからそうご承知ください。そのかわりあの長崎の女の方は私方へ頂きます。」と無理矢理に長崎の女を貰ってつれて帰ってしまった。伊勢屋の方では大層驚いたけれども、今更反対することも出来ないだろうから次の日の輿入れを待つほかはなかった。

すると次の日のその時間になって輿入れの行列が着いた。花嫁が輿から出て来て綿帽子を取ると思いがけなくあの長崎の女だった。相手の親の才覚で何もかも丸く治まった。その話を聞いて伊勢屋よりももっと立派な資産家からその娘を貰いに来て彼女は晴れてその家に嫁入り、幸福になった。伊勢屋もその娘の親の商家も息子夫婦もその後幸福に栄えたと言うことだ、と私の家に来た人が話してくれた。[68]

何もかも丸く治まってお目出度い事である。長崎からはるばる歩いて訪ねて来たという女性は大変に勇気のある人だった。汚い乞食の格好をして何百里という道を歩いて来たのだから時にはひどい目にあったり辱められたりしただろう。多分野宿もしたのだろうから、日に焼けて真っ黒になって江戸に着いたのではないか。その後でも風呂に入っただけで見違えるような美人になったというのだからよほどきれいな人だったのだろうが、もし美人でなかったら受け入れられていただろうか。 伊勢屋の主人夫婦はこの女性の様子から心のよさや真心を感じたというのだから必ずしも美人だったから喜んで彼女を迎えたのではないらしいが、それは相当心の大きいよい人たちだったと言うべきである。親は息子より大人物だったのだろう。

嫁に来るはずだった女性の親も立派である。結納までかわしていた娘の婿になるはずだった伊勢やから離縁を宣告されて、どんなに怒っても当たり前だった所だが、怒らず、娘の名も傷つけず、穏やかによい解決案を出した父親はよほど頭がいい。長崎の女を娘として扱って一応結婚式を挙げて本物の娘が離縁になったというへんな噂が立たないようにしたというのだが、そのためにいい噂が立って若い娘はもっとよい家と縁組みをしたという。よい解決法を考えたから何もかもめでたく落ち着いたというのだがそんなに簡単に解決したのだろうか。長崎の女に着せた花嫁衣裳は多分娘のために用意されていたものだろう。それを惜しげもなく他人の女に着せて娘として嫁入らせたというのだから大変に心の大きい人たちである。これが実際に起った事ならば非常に珍しい良い人たちばかりの結構なケースである。

---

68 耳袋、2:125-127。